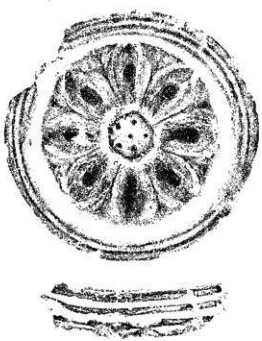
彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集

竹ヶ鼻廃寺Ⅳ

－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業－



平成22年３月

彦根市教育委員会

目　次

例言
Ⅰ　はじめに――1
Ⅱ　位置と環境――1
Ⅲ　発掘調査の成果――8
　1　基本土層――8
　2　検出遺構――11
　3　出土遺物――22
Ⅳ　おわりに――47
写真図版

例　言

1．本書は、彦根市教育委員会が平成20年度に宅地造成工事に伴って実施した、発掘調査の成果を納めたものである。
2．本調査の調査地は、彦根市竹ヶ鼻町字北濱台159番　外15筆に位置する。
3．本調査は、平成20年6月10日に試掘調査を実施したところ遺構を確認したため、同年10月20日～平成21年1月30日まで現地調査を実施し、平成21年5月8日～平成22年3月19日の間、資料整理を行った。
4．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。平成20年度・平成21年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成20年度】

文化財部長：西川太平	文化財部次長：寺嶋　勲
課　　長：谷口　徹	課長補佐（兼史跡整備係長）：久保達彦
文化財係長：広瀬浩隆	主　　査：志賀昌貢
副 主 査：北川恭子	主　　任：池田隼人
主　　任：高木絵美	主　　任：林　昭男
技　　師：大岡由記子	技　　師：三尾次郎

【平成21年度】

文化財部長：松岡一男	文化財部次長（兼文化財課長）：谷口　徹
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦	史跡整備係長：志賀昌貢
副 主 査：北川恭子	主　　任：辻　嘉光
主　　任：高木絵美	主　　任：池田隼人
主　　任：林　昭男	技　　師：三尾次郎
技　　師：戸塚洋輔	技　　師：田中良輔
技　　師：下高大輔	

5．本調査には以下の諸氏が参加した。
北川遼（滋賀県立大学学生）・吉原正興・高田慶子・中川浩行・清水啓邦・辻節男・野瀬省一・西村朝男・池端清・片山正範・浜野勲・大橋後一・前田宏・市田政子・田中喜代子・友田勇・中田鉄雄・山路弘行・田部健次郎・川上俊水・藤原輝雄・川崎浄子・中川香代（以上作業員）
6．調査後の瓦の整理において滋賀県教育委員会文化財保護課北村圭弘氏、鋳造関連遺物の整理において安土城考古博物館大道和人氏、埴輪の整理において滋賀県文化財保護協会辻川哲朗氏のご教授を得た。また、鉄製品のX線写真の撮影に関して同協会中川正人氏のご協力を得た。
7．本書は林が執筆した。
8．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
9．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

Ⅰ　はじめに

本書は、民間開発による宅地造成工事に伴って実施した竹ヶ鼻廃寺（彦根市竹ヶ鼻町字北濱台159番　外15筆）の発掘調査の成果をまとめたものである。平成20年６月10日に試掘調査を実施したところ開発予定地全域（約6,352㎡）で遺物・遺構が確認されたため、開発業者と協議を行い、宅地造成工事予定地内の道路敷き部分を本発掘調査の対象範囲とした。調査は、同年10月20日から平成21年１月30日まで現地で発掘調査を実施し、平成21年５月８日から平成22年３月19日まで整理調査を行ない本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

Ⅱ　位置と環境

〔地理的環境〕

竹ヶ鼻廃寺は滋賀県彦根市竹ヶ鼻町に位置する古代寺院・地方官衙の比定地である。竹ヶ鼻町は彦根市のほぼ中央部を南東から北西に流れる犬上川下流の右岸微高地上に位置する。当該周辺地域は鈴鹿山系から流れる犬上川が多賀町の楢崎付近を扇頂とし、西北方向を扇の軸とする典型的な扇状地を形成する。竹ヶ鼻町から犬上群豊郷町にかけて標高97～100m付近を扇状地の境とするが、当遺跡はその扇状地外側の氾濫平野に位置しており、扇状地との

図１　竹ヶ鼻廃寺位置図

境付近という立地条件から多くの湧水池が見られる。これらの湧水池が下流の水田の重要な水源となっている。遺跡の周囲の環境を見渡すと、北方には犬上川と同じく鈴鹿山系を源とする芹川が流れており、その両岸に鞍掛山（大堀山）と亀甲山（東山）が並んでいる。東・南方は、多賀大社・敏満寺付近の青竜山の丘陵に向かって平野が広がっており、西方は琵琶湖岸に向かって沖積平野が形成されている。

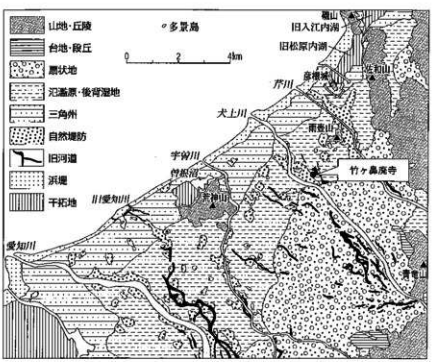


図2　彦根の自然地形（『新修彦根市史』第1巻より）

〔歴史的環境〕

縄文時代　屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代　前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大園遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曽川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曽川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開す

る傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。

古墳時代　古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。竹ヶ鼻廃寺周辺でも、JR東海道線の南彦根駅と犬上川橋梁の中間に「椿塚」という藪があり、鉄道敷設の際の土取で石室が発見され須恵器の出土が伝わることから後期古墳が存在した可能性が高い。また、犬上川河口に位置する八坂東遺跡からは後期の埴輪が出土している。これらより、犬上川中・下流域には埋没古墳が存在する可能性がある。

白鳳～奈良時代　7世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺・福満遺跡・法士南遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺の南東2 km付近に、畿内と東国を結ぶ推定古代東山道が通過しており、交通・流通面において重要な立地にあったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物郡や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

〔竹ヶ鼻廃寺の概要と既往調査〕

竹ヶ鼻廃寺は、彦根市竹ヶ鼻町の小字「上寺街道」「下寺街道」「石仏」「薬師堂」「四反地」などに所在する。現在、JR琵琶湖線南彦根駅の西南300mに位置する。周辺は犬上郡条里の北で33度東に振れる地割りや、犬上川の氾濫による不整形な地割りが広がっている。しかし、寺域と考えられる上記5つの小字の範囲ではほぼ正南北地割りであり、また当該地では昔より耕作などに伴い瓦や須恵器が表採されてきた。以上より上記5つの小字の範囲を中心に、東西、南北ともに300mの寺域が想定され、白鳳時代に創建された犬上郡最古で郡を代表する古代寺院であると考えられている。当遺跡が最初に紹介されたのは1936年滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会発行の『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』であった。そこでは、きわめて簡潔に軒丸瓦、軒平瓦の存在が紹介された。その後『彦根市史』で更に詳しく遺跡の紹介

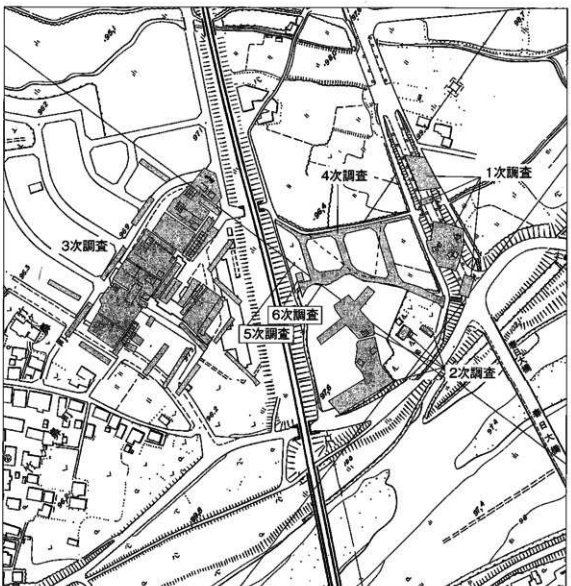


図３　竹ヶ鼻廃寺発掘調査位置図

調査番号	調査地／調査面積（㎡）／調査原因	調査期間	調査主体	主な検出遺構・遺物
1	竹ヶ鼻町樋ノ口178他 11,109（申請面積） 市道改良工事	1983年12月 ～ 1984年３月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物（時期不詳） 土師器、須恵器
2	竹ヶ鼻町四反地252・１他 6,973（申請面積） 集合住宅建設工事	1992年８月 ～ 1993年２月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物（時期不詳） 瓦、土師器、須恵器、納銭壺、子持勾玉
3	竹ヶ鼻町282他 29,500（申請面積） 大学村建設及び区画整理事業	1995年５月 ～ 1995年12月	彦根市教育委員会	竪穴住居（古墳後期）、掘立柱建物・塀・井戸（奈良・平安）、古代の郡役所（郡家）の遺構である可能性 瓦、土師器、須恵器、円面硯、鋤鍬
4	竹ヶ鼻町宇北浦台159他 1,730（実質発掘調査面積） 宅地造成工事	2008年10月 ～ 2009年１月	彦根市教育委員会	溝（古墳後期・奈良・平安）、土坑（古墳後期・奈良・平安）、掘立柱建物（古墳後期・奈良・平安） 瓦、土師器、須恵器、墳輪、鉄製品、鋳造関連遺物
5	竹ヶ鼻町276-12 2.25（実質発掘調査面積） 個人住宅建設	2009年８月	彦根市教育委員会	土坑（江戸）・井戸（江戸） 瓦
6	竹ヶ鼻町276-11 35（実質発掘調査面積） 個人住宅建設	2009年10月	彦根市教育委員会	土坑（平安）・水田（平安～鎌倉） 瓦、土師器、須恵器

表１　竹ヶ鼻廃寺発掘調査一覧

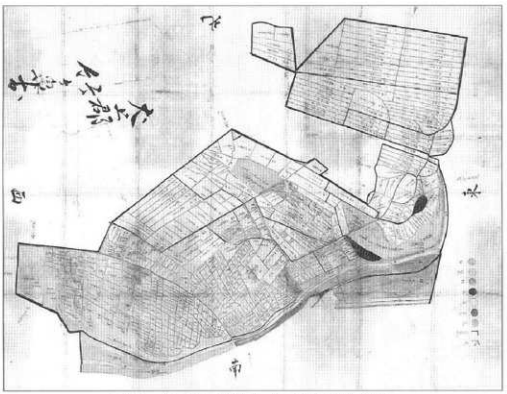


写真１　犬上郡竹ヶ鼻村耕地絵図（滋賀県立図書館蔵）

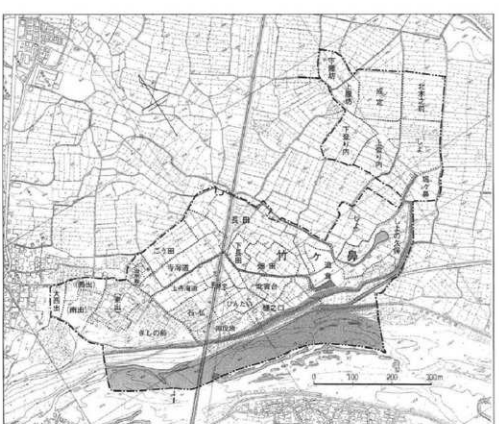


図４　竹ヶ鼻村小字図

がなされた。そこでは①古瓦の散布する地域が、竹ヶ鼻町小字下寺街道・上寺街道・薬師堂・石仏という東西・南北、おのおの約300mの範囲に及ぶこと、②かつては全面ほぼおなじ高さの畑地であったが、瓦の分布区域を貫く東海道線敷設工事と複線工事の採土によって、現在では南側の畑地をのぞいて、それより1～1.5m低い水田となっていること、③下寺街道の一部で、北方約三反を占める旧称要法寺では現在の水田の面から約50cmの耕土を経て瓦の層に達すること、④下寺街道の地区では、今まで数個の礎石が掘り出されて、その内3個は、おのおの都恵神社・即成寺・個人宅に現存していること、⑤下寺街道では、幅1m程の粘土のたかまりが直線状に連なっていたといい、土壇の残存したものと考えられるから、建築の一つが下寺街道に建っていたことはあきらかであるということ、⑥軒丸瓦2種類、軒平瓦1種類と須恵器2点の資料紹介、⑦近世の資料に「恒河寺」があったとあることなど、それまでの経緯が詳細にまとめられている。その後、今回の調査に至るまでに、彦根市教育委員会により3度にわたる発掘調査が実施された。『新修彦根市史』はそれらの新知見を踏まえ、軒瓦などについて更に詳述されている。以下、既往調査成果について概観する。

≪1次調査≫

竹ヶ鼻廃寺における初めての発掘調査である。昭和58年度に市道改良工事に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は今回（4次）の調査地の南西部に位置した。7世紀代の遺物を伴う竪穴住居が8棟、時期不詳の掘立柱建物が8棟検出された。寺院建立以前の集落が確認され、寺院に関わる遺構は検出されなかった。

≪2次調査≫

平成2年度に集合住宅建設に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は今回（4次）の調査地の南側、都恵神社の西側に位置した。古墳時代前期の遺物が伴う竪穴住居が6棟、時期不詳の掘立柱建物3棟が検出された。また、包含層から、6世紀後葉～7世紀中葉までの遺物とともに瓦類も出土した。1次調査同様、寺院関連遺構は検出されず、寺院建立以前の集落が確認された。なお、この調査では、弥生時代前期後半の遺物が竪穴式住居の床面から出土している。

≪3次調査≫

平成7年度に大学むら建設に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は、現在のJR琵琶湖線の西側に当り、遺跡の中心部と想定される範囲であった。調査の結果、寺院関連遺構は検出されなかった。寺院跡地一帯は整地されており、その整地層を基盤層とし規模の大きな掘立柱建物群や柵列、井戸が検出された。整地層に含まれている遺物などから、検出された遺構は奈良時代中期から平安時代と考えられているが、その規模・配列などより古代の郡役所（郡衙）である可能性が高いとされている。出土遺物では、寺院の性格を検討しうる瓦資料が多量に出土するとともに、井戸跡より青銅製の匙が出土したことが特筆される。全長23cmで、匙部は窪みが少なく先端が尖った木の葉形をしている。正倉院に調査済みの資料が保存されているが、遺跡からの出土は稀少である。

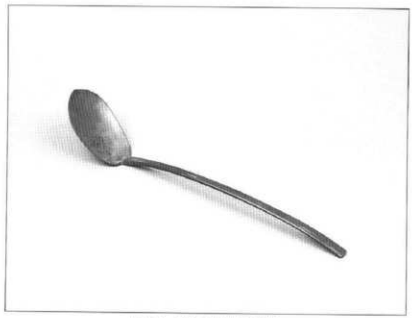


写真2　3次調査出土の銅匙

以上、これまでに実施された3度にわたる発掘調査について概観した。これら3次にわたる調査についてまとめると、これまでの調査では寺院関連遺構は確認されていない。しかし、寺院の性格を探る上で重要な資料である瓦をはじめとする多量の遺物が出土した。また、寺院建立以前の状況を検討しうる、古墳時代以前の遺構・遺物を確認した。なにより大きな成果は3次調査による郡衙関連遺構の確認である。このように、調査以前は、表採資料などから寺院の存在のみの想定であったが、調査を通して、寺院前後の時期の新知見を得ることができたと言えよう。

〔参考文献〕

滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会　1936『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』
滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1995『八坂東遺跡』
彦根市　1960『彦根市市』上冊
彦根市　2007『新修彦根市史』第1巻通史編　古代・中世
彦根市教育委員会　1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
彦根市教育委員会　1993『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第21集
彦根市教育委員会　1996『竹ヶ鼻廃寺発掘調査現地説明会資料』
彦根市教育委員会　2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集

Ⅲ　発掘調査の成果

1　基本土層

調査地は、犬上川下流の右岸微高地上の標高97m 前後の竹ヶ鼻町市街地に位置する。調査対象地は耕作地であるが、周辺はJR 南彦根駅近郊ということもあり宅地化の激しい地域である。しかし、それら宅地化の進行している地域もかつては畑地が広がっていた。

基本土層として４層の堆積を確認した。第１層が表土としての青灰色粘質土（近現代耕作土）、第２層が黄褐色粘質土（床土）、第３層は暗青灰色砂質土（旧耕作土）、第４層が遺構面となり黄褐色粘質土である。調査区全般この基本土層の堆積状況であるが、調査区北西側、現在のJR 琵琶湖線に近づくに従い、第４層が傾斜し下がっていく状況で、第３層と第４層の間ににぶい黄褐色粘質土が堆積する。この層は古代の遺物を包含するため、古代以降の整地段階で堆積した整地層と思われる。調査地の遺構検出面（第４層）は、南東側から北西側に

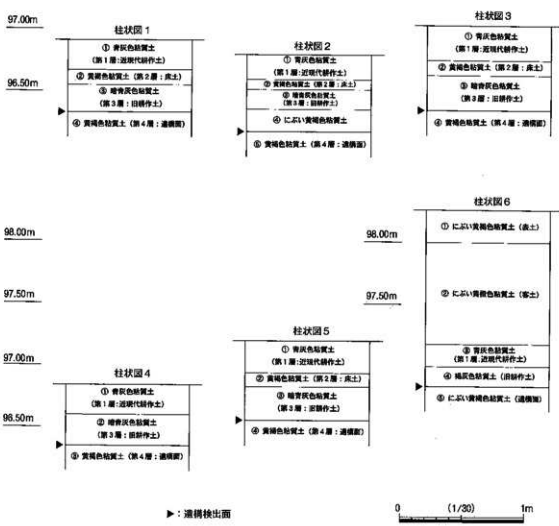


図５　基本層序

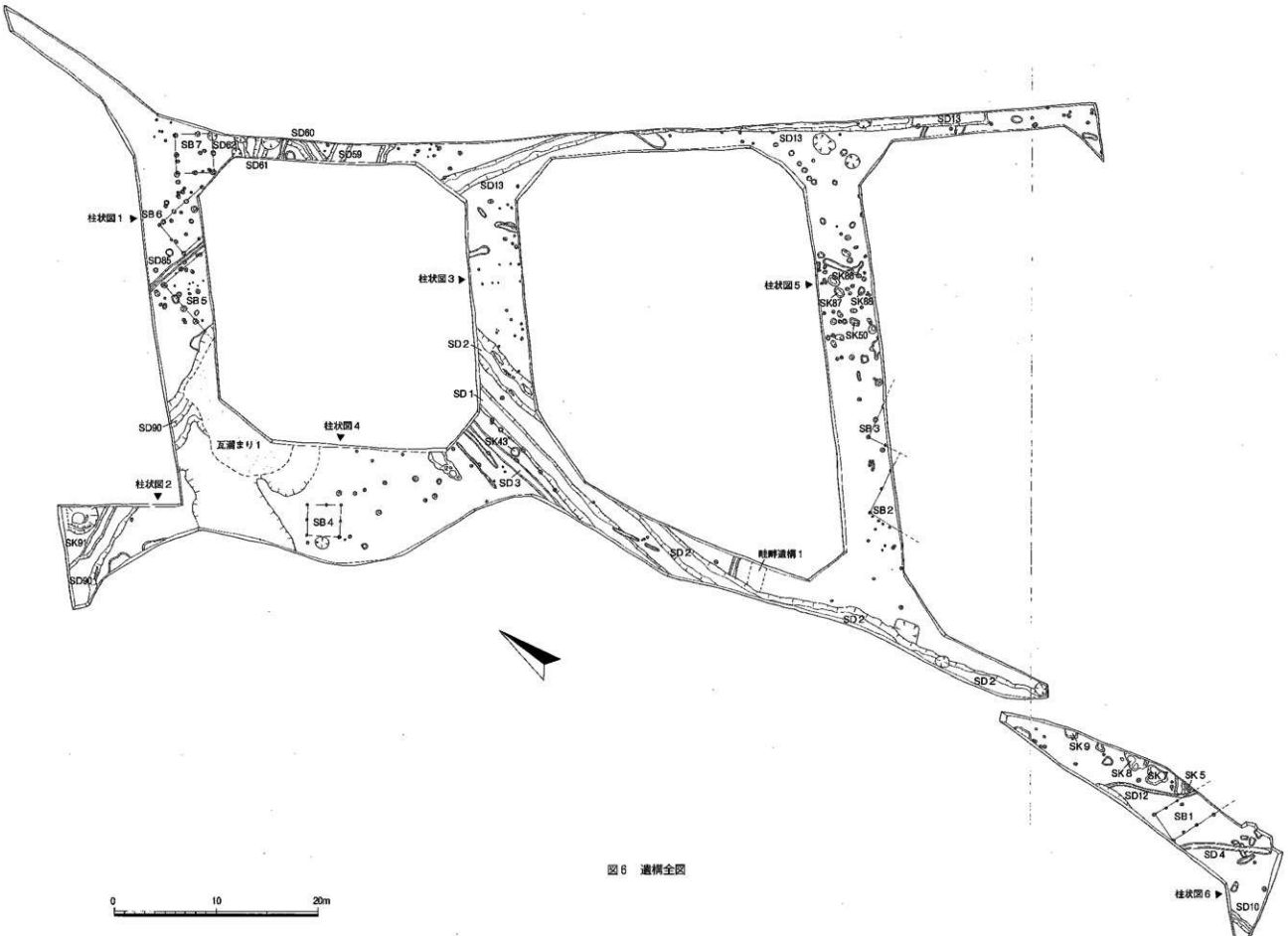

SD60
SB7
SD62
SD61
SD59
SD13
SD18
柱状図1
SB6
SD85
SB5
柱状図3
SD2
SD1
柱状図5
SK86
SK87
SK88
SK50
SB3
SD90
瓦溜まり1
柱状図4
SK43
SD3
柱状図2
SB4
SK9
SD90-1
SB2
SD2
畦畔遺構1
SK9
SK8
SK7
SK5
SD12
SB1
SD4
柱状図6
SD10
0
10
20m

図6　遺構全図

地形が下がっており、あるいはこの整地の段階で、遺構検出面（第４層）も標高の高い側は削られ、その土を標高の低い北西側や落ち込みなどに盛土し整地を行った可能性が考えられる。

また、第２層の旧耕作土に関しては、畦畔遺構１の土層断面より平安時代後半～中世前期以降の耕作土であると考えられる。

２　検出遺構

今回の調査は、宅地造成工事に伴うものであり、開発業者との協議の結果、本調査の範囲は道路・調整池部分1,790㎡とした。多数の溝、土坑、ピット、掘立柱建物などを検出したが、これら多数の遺構は古墳時代から中世にいたるまでの複数の時期のものであった。それらは大きく分けて４時期に分かれる。本報告では便宜上各時代を次のようにⅠ～Ⅳ期に区分した。

【Ⅰ期】…古墳時代以前の時期。当地に寺院が建立される前の時期。

【Ⅱ期】…白鳳期。寺院建立に伴う時期。陶邑編年でTK217・TK46型式（田辺1996・1981）に平行する須恵器を伴い、概ね７世紀代とされる時期。

【Ⅲ期】…奈良時代。陶邑編年でMT16型式（田辺1996・1981）に平行する須恵器を伴い、概ね８世紀代とされる時期。

【Ⅳ期】…平安時代後半～中世前期。土師質土器皿などより概ね12世紀代とされる時期。

以下、時期ごとに主要遺構を中心に概略を報告する。

【Ⅰ期】

古墳時代以前の遺構は、寺院が建立される前の当地に広がっていた集落関連の遺構と思われる。遺構の分布は、SD１から東側に偏っており、東にいくほど遺構密度は高まっているといえる。逆に、SD１から西側では、ほとんど遺構は検出されず、遺物の出土量もきわめて希薄であるという状況である。当期の遺構は掘立柱建物、溝、土坑などが検出されている。

掘立柱建物（SB１～SB３）

調査区東側より、おおよそ方位を同じくする掘立柱建物３棟を検出した。３棟の内２棟の柱穴で古式土師器が出土し、残り１棟も方位を同じくしているので同時期と考えた。なお、各掘立柱建物の掘り方と柱穴は同じで、掘り方には褐灰色粘質土の地山ブロック混じり、柱穴には黒褐色粘質土が流入していた。

SB１（図７）

今回の調査区で一番東側から検出された掘立柱建物である。棟の方位はＮ－59°－Ｅを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行１間（3.16m）×桁行３間以上（4.86m以上）の東西棟建物である。柱間は梁側では3.16m、桁側では1.26～1.98mである。掘り方の平面形は

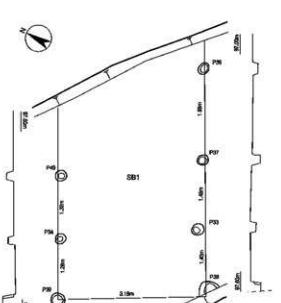


図7　掘立柱建物（SB 1）平面図・断面図

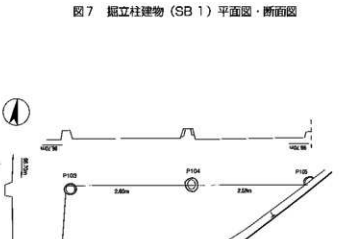


図8　掘立柱建物（SB 2）平面図・断面図

円形で直径0.2～0.4m を測る。柱痕は平面円形で直径0.1～0.3m を測る。P39から古式土師器甕（1）が出土している。

SB 2（図8）

SB 1の北東側で、SB 2とSB 3が近接して確認された。SB 2はその内の南西側の棟である。棟の方位はN－80°－Eを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行1間以上（2.60m以上）×桁行2間以上（5.12m以上）の東西棟建物である。柱間は梁側では2.6m、桁側では2.6m前後である。掘り方の平面形は円形で直径0.3m前後を測る。柱痕は平面円形で直径0.2m前後を測る。柱穴からの出土遺物はない。

SB 3（図9）

SB 2の北東側で検出した。SB 2とSB 3は非常に近接しているため同時並存は困難であると思われる。あるいは切りあい関係があるかもしれない。棟の方位はN－81°－Eを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行1間以上（1.86m以上）×桁行2間以上（3.32m以上）の東西棟建物である。柱間は梁側では1.86m、桁側では1.52～1.80mである。掘り方の平面形は円形で直径0.4m前後を測る。柱痕は平面円形で直径0.25m前後を測る。SB 3を構成するP45

から古式土師器甕（4）が出土している。

溝

調査区東側で、何本か溝を検出しているが、古墳時代に伴う溝はSD12だけである。また、SB 2・SB 3の掘立柱建物に付随する溝も確認されなかった。

SD12

SB 1北側で検出した溝である。幅約0.4m、深さ約0.1mで断面が椀状を呈している。溝は途中で北方向に分岐している。分岐した溝との切り合い関係はなく同時のものである。分岐したものは幅約0.9mと若干広くなるが、深さは変わらず断面形態も椀状を呈す。溝の堆積土は1層で灰黄褐色粘質土である。土師器（2）と須恵器（3）が出土している。

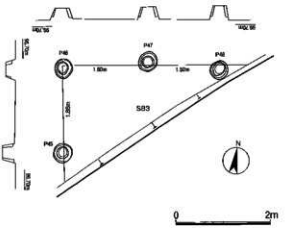


図9　掘立柱建物（SB 3）平面図・断面図

土坑

SB 1の北側や、SB 2・SB 3の北東側で、まとまって土坑が検出されている。

SK 5・SK 8・SK 9

SB 1近辺のものは、SK 5・SK 8・SK 9である。平面不定形で深さも約0.2mと浅くまとまりがない。また、遺物も土師器の小片が出土しているだけで時期も不明確である。構築の用途や意図は不明である。

SK50・SK86～SK88

SB 2・SB 3の北東側でSK50、SK86～SK88などの平面形態や深さなどが近似した土坑が検出されている。平面形態は楕円形で約0.7m×約1.1mを測る。深さは約0.2mを測り、断面形態は椀状を呈す。堆積土も同じで黒褐色粘質土の岩干炭化物が混じる1層の堆積である。SK88から須恵器高杯（6・7）が出土している。周辺は小ピットや小さい溝など遺構の密集地である。構築の用途や意図は不明である。

SK43

SD 1の西側で検出した。平面形態円形で直径0.9m、深さ0.5mを測る。断面形態椀状で堆積土は褐灰色粘質土である。遺物は古式土師器高杯（5）が出土している。周辺に同時期の遺構はない。構築の用途や意図は不明である。

【Ⅱ期】

この時期の遺構は少ない。しかし、時期的に寺院建立時に伴う可能性がある。当期の遺構は溝（区画施設など）が検出されている。

溝

この時期に比定できる遺構はSD 1とSD13である。他に、SD13の北西側にも溝が多数あるが、遺物が小片であり、掘削範囲も道路拡張部分と狭小であるため、遺構の時期・性格などの判断が明確でない。

SD 1

寺域の想定される南北地割の東字境で検出した南北溝。幅約1.6m前後で一定しており字境の位置でほぼ正南北にのびている。深さは0.2m前後と浅く、断面形態は緩やかな椀状を呈している。遺物量は少量であったが、それらの時期幅よりこの溝は短期間で廃絶されたようである。堆積土は1層で灰黄褐色粘質土である。この溝の出土位置や形態、また溝より西では、古墳時代の遺物・遺構がほとんど検出されないことなどを勘案すると、この溝の性格は寺域の東境を画する区画施設の可能性が高いと思われる。また、寺域の区画施設としては築地塀なども多いため、この溝が築地塀に伴うものである可能性も考えられた。そのため調査区壁面の土層の断面観察を詳細に行ったが、断面からは築地塀の痕跡は認められなかった。さらに、この溝の西側の肩に沿うように柱穴が南北に連なっており、柵SA 1を形成している。このSA 1は、遺構検出時にSD 1を切っていることを確認しており、SD 1埋没後の遺構である。SD 1と同じ南北延長上に遺構は伸びており、区画施設としての機能を踏襲していると思われる。以上より、SD 1は寺域の東境を画する区画施設の可能性が高いと考えられるが、その遺構の浅さや、基本土層の項でふれた、調査区北西側の古代の遺物を含む整地土の存在から、SD 1周辺の遺構面は、古代以降に大規模に削られている可能性がある。また、SD 1が北側に延びていった先の道路拡張部分で遺構の続きを確認できていない点も、この大規模な整地段階で旧地形が削られたことに起因すると考える。

SD13

調査区北側に位置し、緩やかに弧を描きながら東西に伸びる溝。幅約1.4mで、深さ約0.4mを測り断面形態は椀状を呈している。堆積土は基本的には2層で①灰黄褐色粘質土と②黒褐色粘質土であるが、一部炭化物が混じる黒褐色粘質土の焼土層が認められる。出土遺物は埴輪や須恵器など古墳時代の遺物も多く含んでおり、それらにはさほど磨耗が見られないため、遠方より流れてきたという可能性は低そうである。埴輪の出土より、調査地近辺に古墳が存在した可能性がある。この溝の性格などは、明言できないが、堆積土の様子や焼土層の存在、出土遺物の状態などを勘案すると、自然堆積の可能性は低そうである。SD13はそのまま西に伸びていくと、寺域の区画施設と考えられるSD 1とぶつかる位置にある。その位置などを勘案するとあるいは、寺院建立のおりに埋められ整地された可能性がある。

柵

SA 1

SD 1西側の肩に沿うように柵SA 1を検出した。SA 1はSD 1を切っており、それが廃絶された後に構築されたものである。また、その方向もSD 1をほぼ踏襲していることより、

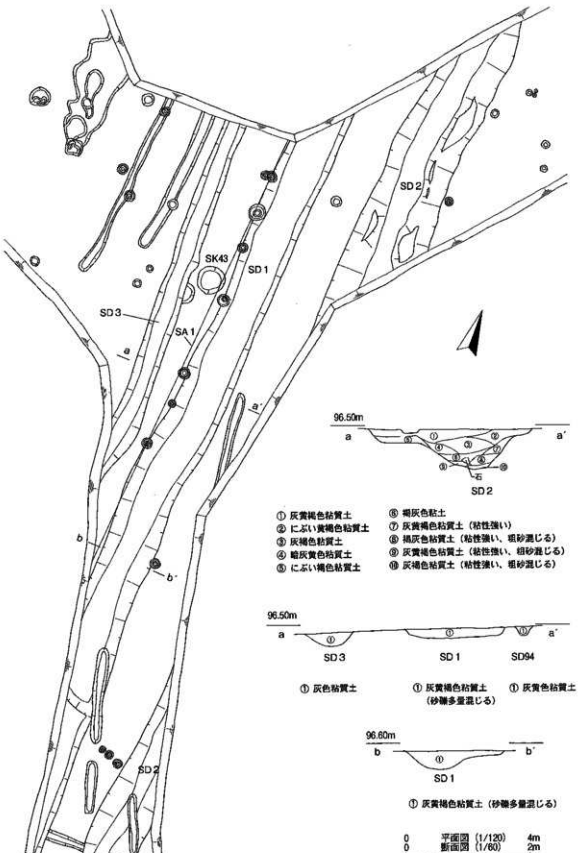


図10 溝（SD１・２）・柵（SA１）平面図・断面図

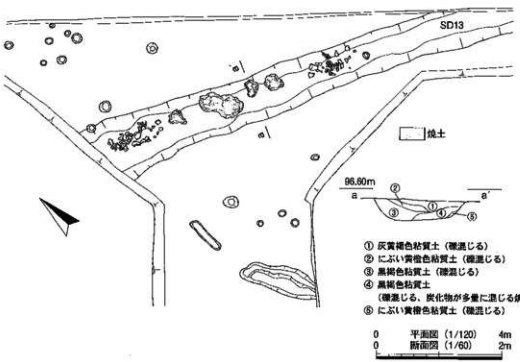


図11 溝（SD13）平面図・断面図

SA 1はSD 1に引き続き区画施設としての機能を担ったと考えられる。SA 1を構成する柱穴の形状などはほぼそろっており、掘り方の平面形は円形で直径0.4m前後を測る。柱痕は平面円形で直径0.25m前後を測る。柱穴から遺物は出土していないが、SD 1に引き続き区画施設として機能したと考えられるため、この時期に比定した。

【Ⅲ期】

SD 1廃絶後から奈良時代後半までの時期で、今回の調査で最も遺構が検出され、遺物量も豊富であった。遺構の分布は調査区の北西側が目立つが、最も南東側でも検出されている。

掘立柱建物（SB 5・SB 6）

調査区北西側より、おおよそ方位を同じくする掘立柱建物2棟を検出した。掘立柱建物を構成する柱穴で遺物の出土はなかったが、その建物軸が、区画施設と考えられるSD 1やSA 1と同じ方向である南北を向いている。なお、2棟の掘立柱建物の掘り方と柱穴は同じで、掘り方には暗オリーブ褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘質土が流入していた。

SB 5（図12）

SB 5とSB 6は隣接して検出された。SB 5はその南西側である。棟の方位はN－13°－Eを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行2間以上（4.70m以上）×桁行3間以上（4.74m）の南北棟建物である。柱間は梁側では2.24～2.46m、桁側では1.54～1.64mである。掘

り方の平面形は円形で直径0.3～0.8mを測る。柱痕は平面円形で直径0.2～0.4mを測る。

SB 6（図13）

SB 6はSB 5の北東側である。棟の方位はN－80°－Wを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行2間以上（3.60m以上）×桁行3間以上（5.50m以上）の東西棟建物である。柱間は梁側では1.74～1.86m、桁側では1.56～2.06mである。掘り方の平面形は円形で直径0.3～0.4mを測る。柱痕は平面円形で直径0.2～0.3mを測る。なお、SB 5とSB 6のあいだに、その建物に沿うようにSD85が検出された。その位置・形状よりSB 5・SB 6に伴う雨落ち溝と考えられる。

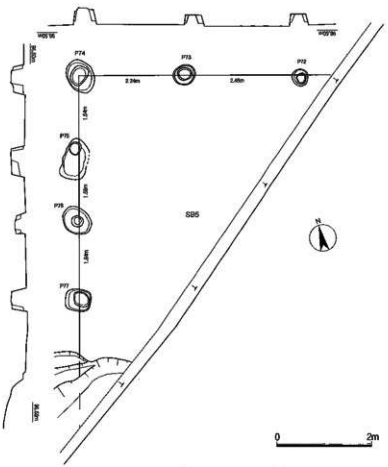


図12　掘立柱建物（SB 5）平面図・断面図

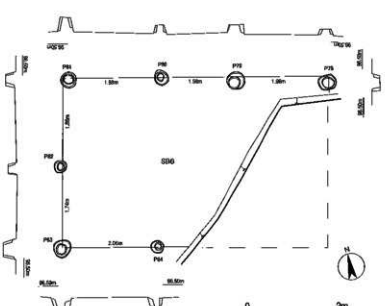


図13　掘立柱建物（SB 6）平面図・断面図

溝

溝は調査区の西側と、反対の南東側で検出された。

SD10

調査区の最も南東側で検出された溝。幅約0.5m、深さ約0.2mを測り断面形態は椀状を呈している。堆積土は1層でにぶい褐色粘質土である。出土遺物は須恵器（39）などだが、少量であった。周辺に同時期の遺構がほとんどなく、構築の用途や意図は不明である。

SD60

調査区の北側、道路拡張分の狭小な範囲で検出した溝である。幅約1.6m、深さ約0.3mを測り断面形態は椀状を呈している。堆積土は1層で暗灰黄色粘質土である。出土遺物は須恵器（42）である。狭小な範囲なため、構築の用途や意図は不明である。

SD90

調査区西側の東西方向の溝。緩やかに弧をえがきながら東から南西に向かっていく溝。幅約2.5m、深さ約0.5mを測り断面形態は隅丸の逆台形状を呈している。出土遺物は時期幅、種類とも多種多様であり、量も豊富である。出土遺物はさほど磨耗しておらず、遠方からの流入は考えづらい。切りあい関係はSK91と、瓦溜まり1に切られている。

SD85

SB 5とSB 6の間で建物に沿う形で検出された溝。幅約0.6m、深さ約0.1mで断面椀状である。堆積土は1層で灰黄褐色を呈す。2棟の建物との位置関係より雨落ち溝と思われる。

土坑

溝と同じく調査区西側と南東側で、土坑を検出した。どちらも周辺に同規模の土坑を検出しているが、遺物を伴ったのは、SK 7とSK91のみであった。

SK 7

調査区南東側で検出した遺構。平面形は不定形を呈する。最大幅約1.6mで深さ約0.2mを測る。出土遺物は須恵器（40）である。周辺に同時期の遺構がほとんどなく、構築の用途や意図は不明である。

SK91

調査区最西側でSD90を切る形で検出した。直径約3 mの円形を呈す。深さは約1.3mあり、その堆積を土層断面で観察すると、大きく2層に分けて考えることができる。①②③④層が上層、⑤⑥⑦⑧層以下が下層となる。下層は自然堆積と考えられるが、上層は④層で意図的に大量の瓦が入れられているため、人為的に埋められたものと思われる。瓦当の残りのよい軒丸瓦など多種多様な遺物が出土しているが、その中でも鋳造関連遺物の出土は特筆すべきである。遺物の項で詳しく記すが、鞴羽口、坩堝（取瓶）、鉱滓などが③層の最下部から大量の炭化物に混じって出土した。出土状況より、その場で使用していたものでなく、近くの工房から大量の炭とともに廃棄されたものと思われる。いずれにせよ、SK91周辺で鋳造関連の工房が存在した可能性は高い。

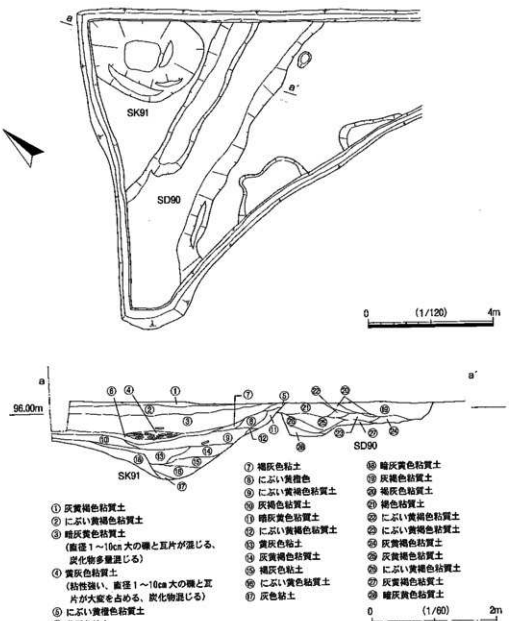


図14 溝（SD90）・土坑（SK91）平面図・断面図

【Ⅳ期】

平安時代後半～中世前期以降の時期。

掘立柱建物

SB 1～SB 3・SB 5・SB 6と建物軸が異なる、2棟の掘立柱建物SB 4・SB 6を検出した。2棟の建物軸の方向はおおよそ同じである。柱穴から時期を特定できる遺物は出土していないものの、他の建物軸と異なること、また、掘り方から布目瓦片が出土していることなどからこの時期でとらえた。なお、2棟の掘立柱建物の掘り方と柱穴は同じで、掘り方には暗オ

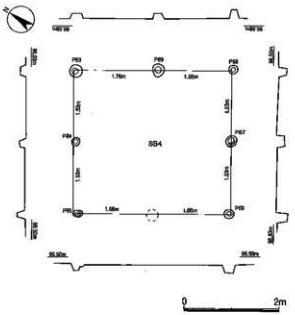


図15　掘立柱建物（SB 4）平面図・断面図

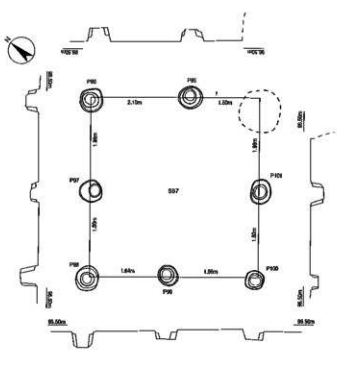


図16　掘立柱建物（SB 7）平面図・断面図

リーブ褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘質土が流入していた。

SB 4（図15）

瓦溜まりの南東で検出された。棟の方位はN－36°－Wを示す。梁行2間（3.06m）×桁行2間（3.32m）の南北棟建物である。柱間は梁側では1.53m、桁側では1.56～1.76mである。掘り方の平面形は円形で直径0.2～0.3mを測る。柱痕は平面円形で直径0.1～0.2mを測る。

SB 7（図16）

SB 6に隣接して検出された。棟の方位はN－42°－Wを示す。梁行2間（3.78m以上）×桁行2間（3.60m）の南北棟建物である。柱間は梁側では1.80～1.98m、桁側では1.50～2.10mである。掘り方の平面形は円形で直径0.4～0.5mを測る。柱痕は平面円形で直径0.3～0.4mを測る。

溝

唯一SD 2だけが検出された。

SD 2

調査区の東側から西にむかって伸びてきた溝がSD 1に規制されるようにその付近で向きを変え北に伸びていく。幅は約2.0m、深さ約0.6mを測り断面形態椀状、またはV字状を呈す。

遺構の東側はそのまま延びていくと犬上川にぶつかる。また、埋土は犬上川よりでは、下層に砂が多量に混じった砂質系の土が堆積しており、それが北西側SD 1近辺にくると粘性の強い粘質土層に変化してくる。この下層の堆積土の違いは、犬上

川よりでは水が流れており、SD 1付近までくるとその流れが滞留していたことが想定できる。遺構底面レベルも東側から西側にむかって下がっていき水が流れやすい。これら諸条件を勘案すると、SD 2は犬上川から取水する灌漑用水路と思われる。

瓦溜まり1

調査区の西側、SB 5の南側で瓦溜まり1を検出した。軒瓦を含む多量の瓦が入っており、整地の折りに土坑に廃棄したものと思われる。出土遺物より平安時代後半～中世前期の段階と思われる。SB 5を構成する柱穴を切っている。

畦畔遺構1（図17）

調査区中央付近の西側で、畦畔遺構1を検出した。現代の畦畔と同じ位置で検出し、断面

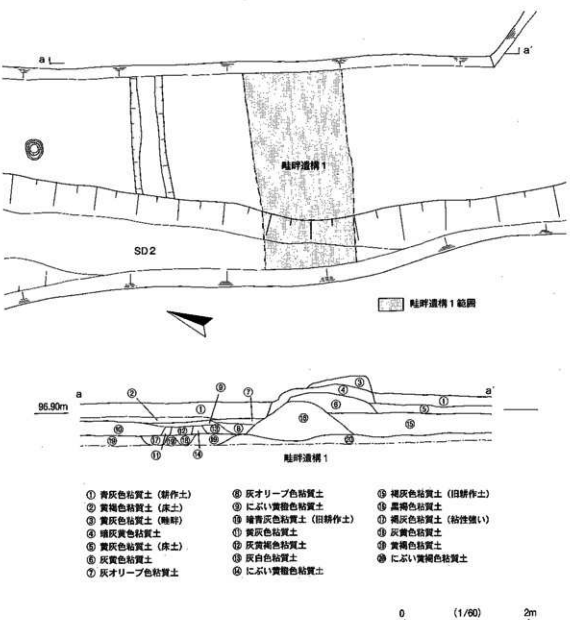


図17 畦畔遺構1 平面図・断面図

より３期の畦畔が確認された。古いものから順にＡ期畦畔・Ｂ期畦畔・Ｃ期畦畔である。断面形態はいずれもおおむね台形である。

最も古いＡ期畦畔は、今回の調査の遺構検出面である⑲・⑳層上面を基盤層として構築されている。⑯層の単層で構築され、幅約1.75m、高さ約0.55mを測る。畦の左側では⑩層上面が、右側では⑮層上面が水田面となり、畦の左側では幅約0.85m、深さ約0.25mの⑦・⑧層を埋土とする溝が形成される。

次に構築されるＢ期畦畔は、Ａ期畦畔を基礎として⑥層の単層で構築され、幅約1.50m、高さ約0.35mを測る。畦の右側では⑤層上面が水田面となり、前段階より高まった田面が形成されている。

最も上面でＣ期畦畔を確認した。Ｃ期の畦畔は現代も使用されているものである。Ａ・Ｂ期畦畔を基礎として③・④層で構築されているが、④層は補修時のものかもしれない。③・④層合わせて、幅約1.75m、高さ約0.45mを測る。畦の左右両側とも①層上面が水田面となっており、近現代の耕作田である。

次に、Ａ～Ｃ期畦畔の時期についてだが、各構築基盤層や遺構との関係が畦畔築造時期の手がかりとなる。最も古いＡ期畦畔は、遺構検出面である⑲・⑳層上面を基盤とし構築されているが、その面で検出されたSD 2との関係をみると、SD 2が埋没した後にその上を横断するようにＡ期畦畔が構築されたことを確認した。SD 2は、土師質土器皿が出土しており、平安時代後半～中世前期の遺構と考えられる。よって、Ａ期畦畔は、平安時代後半～中世前期以降に構築されたものである。Ｂ期畦畔は、Ａ期畦畔とそれに伴う水田面（⑮層）を基盤層としているため、それらに包含される遺物が時期決定の手がかりとなるが、包含されている遺物は破片が多く、量自体少ないため時期決定の決め手に欠ける。しかし、近世以降の陶磁器などは確認されていないため、Ａ期畦畔以降～近世以前に構築された可能性が高いと考えられる。最後のＣ期畦畔は、現代も利用されているものである。その構築の上限は、Ｂ期畦畔とそれに伴う基盤層（⑤・⑩層）が手がかりとなるが、時期決定できる遺物は確認できなかった。

ちなみに各期水田面と、今回の調査の基本土層との関係は、①層が第１層、②層が第２層、⑩層が第３層、⑲・⑳層が第４層にあたる。

3　出土遺物

各遺構出土遺物

SB 1（P39）

SB 1を構成するP39から古式土師器甕１が出土している。外面は摩耗が激しいものの、タテ方向に施されたハケを確認できる。内面はナナメ方向のハケが施されている。

SD12

土師器の壺と須恵器高杯が出土している。2は土師器の底部で、底径4.0cmを測る。3は須恵器高杯の脚部で、底径12.0cmを測る。

SB 2 (P45)

SB 2を構成するP45から古式土師器甕4が出土している。受口状口縁を有し、口縁内外面にヨコナデが施されている。

SK43

5は古式土師器高杯である。口径12.0cmを測り、内湾する椀形の杯部をもつ。内外面とも摩耗が激しいため調整は不明である。

SK88

6は須恵器高杯である。口径11.6cm、器高4.9cmを測る。やや外方に反るように立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。脚部の上方に円形の透かしが3箇所穿たれている。7は須恵器高杯の口縁部である。

SD13

8は古式土師器小型丸底甕である。口径10.0cmを測り、体部内外面はハケ、口縁端部内外面はナデを施す。9は古式土師器小型丸底甕である。口径14.0cmを測る。外面は摩耗のため調整は不明だが、内面はナデを施している。10・11は古式土師器高杯の脚部である。いずれも脚裾部が外反して広がる形態をしている。底径は10が9.2cm、11が12.0cmを測る。12～14は須恵器杯蓋である。天井部が丸いもの(12)と平坦なもの(13・14)がある。いずれも、口縁部は外に開く形態をしている。口径は12が10.6cm、13が12.2cm、14が15.8cmを測る。15～18は須恵器の杯身である。15は口縁部が内傾ぎみに立ち上がり、端部を丸くおさめる。16～18は立ち上がり部が短く内傾する。16・17の底部は丸みをもつ。口径は15が12.0cm、16が9.4cm、17が10.0cm、18が12.6cmを測る。19は須恵器短頸で、口径8.6cmを測る。肩部は明瞭に屈曲し、口縁は外傾ぎみに短く立ち上がる。20は須恵器鉢で、口径9.6cmを測る。内湾する体部を有し、口縁端部で短く上方に立ち上がる。21・22は須恵器高杯である。21は高杯杯部で口径10.8cmを測り、口縁の立ち上がり部が短く内傾する。22は高杯の脚部である。底径20.0cmを測る。23～25は須恵器である。23は球形の体部を有し、外面カキメを施す。24は断面台形状の高台を有す底部で、底径8.0cmを測る。25は緩やかに外傾しながら立ち上がる口縁を有し、外面頸部以下タタキの後カキメが施されている。口径は9.0cmを測る。26～28は須恵器甕である。26は内外面とも摩耗が激しく調整は不明である。27は口縁端部をヘラケズリにより鋭角に作り出している。肩部は外面タタキが施されている。28は口縁部内外面ヨコナデ、頸部以下外面タタキが施される。肩部にタタキ後の線刻が確認できる。口径は26が18.0cm、27が13.2cm、28が18.6cmを測る。29～32は円筒埴輪である。胴部と底部の資料で、確実に朝顔形埴輪・形象埴輪と判断できる資料はなかった。法量は、胴部径が29・30ともに30.0cm、底部径が31で22.0cm、底部高が31で10.7cmを測る。突帯はすべて粘土紐ヨコナデに

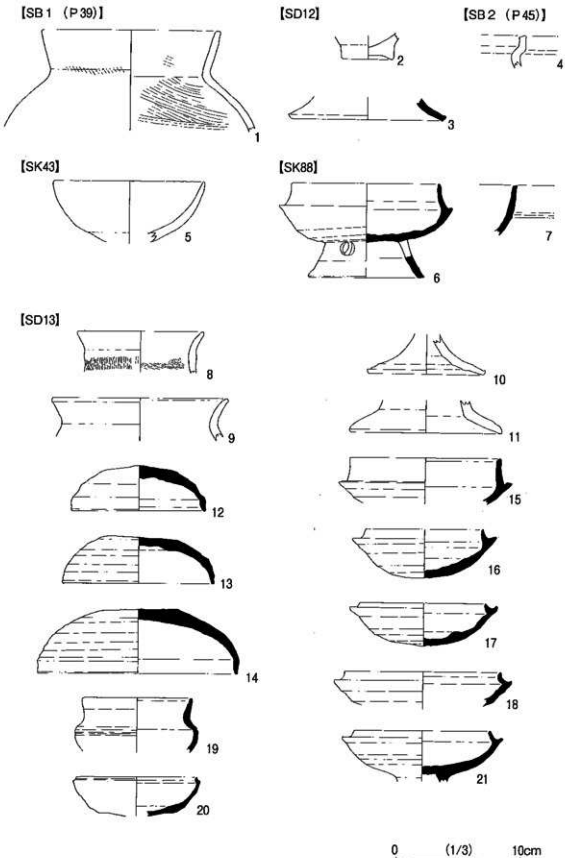


図18 出土遺物実測図 (1)

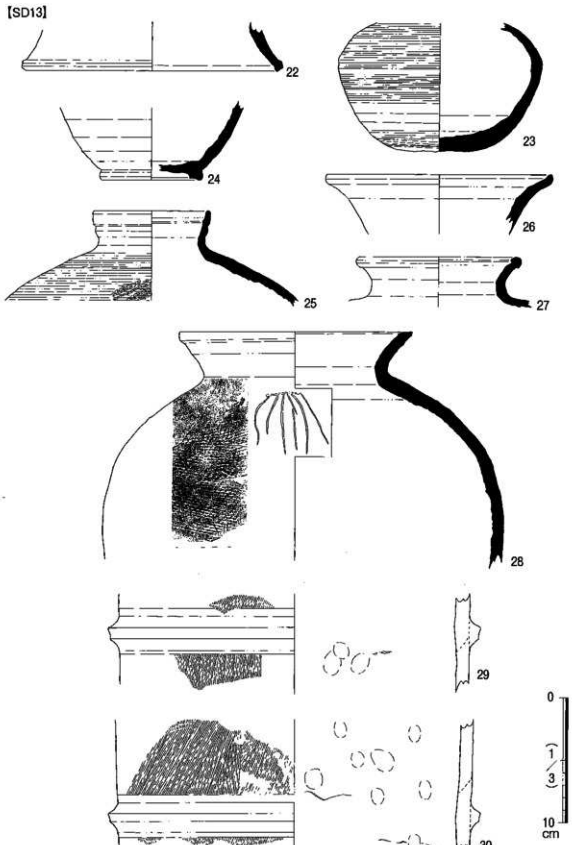


図19 出土遺物実測図（2）

より貼り付けられており、形態は突出度の低い断面台形のものだが、下端に比べて上端がやや突出している。成形技法は29・30の胴部内面に接合痕が確認できるため、粘土紐積み上げによるものである。外面調整は、タテハケまたは右上がりのナナメハケが施されており、いずれも突帯貼付時のナデによって切られている。ハケメの原体の密度は8～9本/cmである。内面調整はナデである。胎土は0.1～0.3cm大の砂礫が混じるなどやや粗雑で、色調は橙色である。焼成は良好で、出土資料中には黒斑も赤色顔料も確認できなかった。透孔の形状は32で円形を確認している。また、31の底面では棒状の圧痕を2箇所確認している。33は、器種・用途ともに不明の鉄製品である。SD13の底面直上からの出土である。径0.6cm、残存長11.0cmほどの棒状の製品で、片端は鍬手状の形状をしている。もう一方の端は欠損して失われている。重量は約18gを測る。

SD 1

34は須恵器の杯蓋で、口径は14.0cmを測る。稜が小さく、口縁部はやや外反ぎみに開き、端部は内傾し明瞭な段を有す。35は須恵器の杯身で、口径14.0cmを測る。口縁の立ち上がり部が短く内傾する。36は須恵器の長頸壺で、口径13.0cmを測る。頸部から口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部は内傾して面をもつ。外面に1条沈線が入る。37・38は須恵器の高杯である。いずれも高杯の杯部である。37は、稜が小さく口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。38は、口縁の立ち上がりは長く、端部に内傾する段を有す。口径は37が16.0cm、38が11.0cmを測る。

SD10

39は須恵器の杯蓋である。口径は11.1cmを測り、天井部が丸く、口縁部は外に開く形態をしている。

SK 7

40は須恵器杯蓋の扁平な宝珠つまみである。径3.2cmを測る。

SK41

41は土師器杯で、口径15.0cmを測る。平らな底面から口縁が内湾しながら立ち上がる。端部内面に1条の沈線が入る。

SD60

42は須恵器杯蓋の扁平な宝珠つまみである。径3.3cmを測る

SD90

43は古式土師器鉢で口径13.4cmを測る。内湾する体部をもち、口縁は「く」字に短くつまみ出される。内外面ともユビオサエ後ナデている。口縁付近はやや強くヨコナデが施されている。44は土師器のミニチュア土器で、口径は2.9cm前後を測る。平底の鉢形をしており、手こねで成形されている。45は土師器甕の把手である。外面はナデ、内面はナデとハケが施されている。明瞭な指頭圧痕が確認できる。46・47は古式土師器の小型丸底甕、48は土師器の甕である。48は外面タタキが施される。口径は46が8.0cmで、47が14.0cm、48が30.0cmを

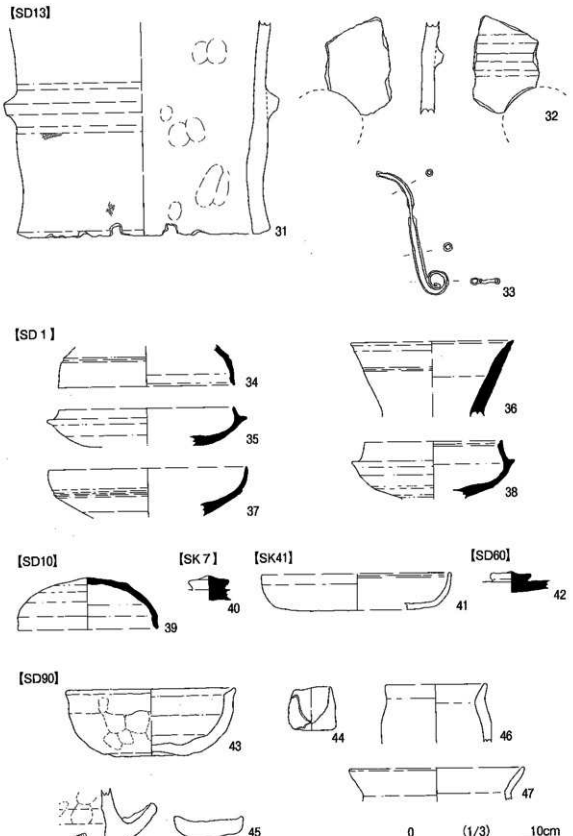


図20　出土遺物実測図（３）

測る。49～54は須恵器の杯蓋である。49・50は天井部が平坦で、口縁部は外に開く形態である。口径は49が9.0cm、50が10.0cmを測る。51・52宝珠つまみを有す杯蓋である。いずれの資料ともつまみは失われている。口縁部内部にかえりを有す。口径は51が9.0cm、52が10.0cmを測る。53・54は扁平な宝珠つまみを有す杯蓋である。いずれの資料ともつまみは失われている。下方に屈曲する口縁部を持ち、口縁部内部に返りが無い。口径は53が14.0cm、54が17.0cmを測る。55～60は須恵器の杯身である。55～58の口縁部は内傾ぎみに短く立ち上がるが、受け部の高さよりも低いため隠れてしまう。底部は篦切後未調整である。口径は55が9.0cm、56が8.9cm、57が9.5cm、58が10.0cmを測る。59・60は、口縁部が外傾ぎみに外上方に立ち上がり、端部はやや先細りになり丸くおさめる。底部は篦切後未調整である。61・62は須恵器高杯である。61は高杯の杯部で口径17.0cmを測り、口縁部は外反ぎみに外上方へ伸びる。端部は外反し丸くおさめる。62は高杯の脚部で底径8.0cmを測る。形態はハの字状に開き、底部端部で屈曲する。本資料で透しは確認できなかった。63・64は須恵器鉢である。いずれも内湾する体部から「く」の字状に屈曲し外上方に立ち上がるが、端部だけ異なり、63はそのまま外上方に伸び丸くおさめ、64は端部で内湾するように立ち上がり丸くおさめる。口径は63が10.0cm、64が12.0cmを測る。65は須恵器長頸壺の頸部で口径は8.6cmを測る。外湾しながら立ち上がり口縁部でさらに外反し、端部はやや先細りになり丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデが施され、その後、外面に2条の沈線が入る。66は須恵器壺の体部である。体部の最大径は16.6cmを測る。調整は内面回転ナデ、外面肩部付近回転ナデで、それ以下の体部には回転ヘラケズリが施されている。外面は調整後、沈線を境として羽状櫛描列点文、櫛描羽状文を上下3段にめぐらしている。67・68は須恵器甕である。67は口縁部が外反し、端部がわずかに内傾し稜ができる。68は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部で上方へ屈曲させている。口径は67が13.6cm、68が20.0cmを測る。69は高杯形器台で底径27.4cmを測る。70は須恵器平瓶で体部での最大径は12.2cmを測る。底部を平坦につくり、そこから丸く天井部に至る形に作る。口頸部は肩部の1箇所に斜め方向に取り付けられているが、その端部は失われており形状は不明である。外面調整は底部から肩部までカキメを施し、底部は篦切り後ナデを行っているが、篦切りの痕跡を確認できるほどであり丁寧ではない。

SK91

71は古式土師器の鉢で口径14.0cmを測る。内湾する体部から、口縁部端部はやや先細りになり丸くおさめる。72は土師器の鍋で口径23.0cmを測る。体部内外面ハケで、口縁部は摩耗でやや調整は判別しづらいが外面にハケの痕跡を一部確認することができた。また、口縁部に径0.6cm前後の透孔が穿たれている。透孔は上方から下方に向かって穿たれている。73～75は須恵器杯蓋である。73は天井を丸くおさめ口縁部との境界にわずかに稜の認められるものである。74は口縁部に小さな返りをもつもので、天井部には扁平な宝珠つまみを有す杯蓋である。本資料のつまみは失われている。75は扁平な宝珠つまみを有す杯蓋である。本資料

【SD90】

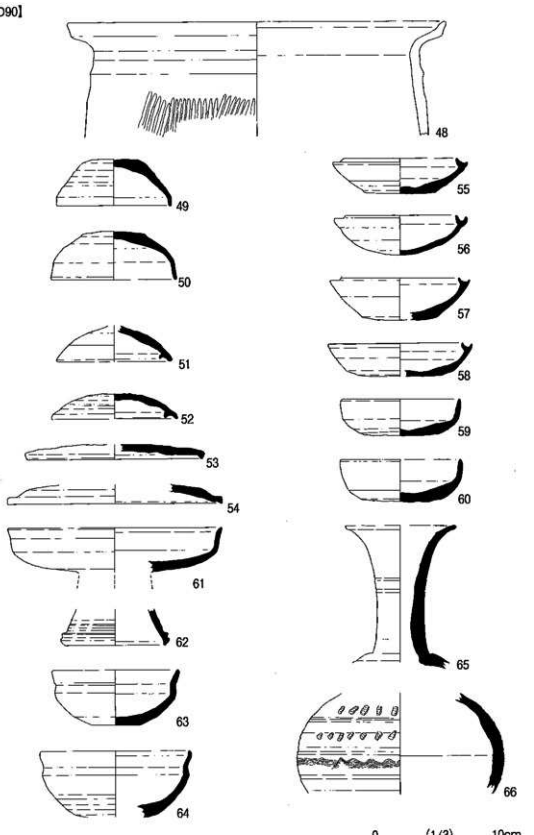


図21　出土遺物実測図（4）

のつまみは失われている。下方に屈曲する口縁部を持ち、口縁部内部に返りが無い。口径は73が9.0cm、74が7.5cm、75が16.0cmを測る。76～78は須恵器杯身である。76・77は立ち上がり部が短く内傾し、底部はやや平坦である。底部篦切り後未調整である。78は口縁端部にタールが付着している。口径は76が8.6cm、77が9.0cm、78が14.0cmを測る。79は土錘である。今回の調査では唯一の出土である。表面は摩耗しており一部欠損している。法量は長さ5.0cm、最大径1.9cm、孔径0.7cm、重さ10.0gを測る。80～85は鋳造関連遺物である。輪羽口（80）と坩堝（取瓶：81～85）、鉱滓が炭化物を大量に含む③層最下部から出土した。80は輪羽口で1点のみの出土であった。先端部が溶解して黒色にガラス質化している。小片ではあるが径を復元すると、外形7.0cm前後、内径3.0cm前後を測る。81～85は坩堝（取瓶）である。7点出土し、6点図化した。細片ばかりで全形を知るうる資料は83のみである。それによると口径14.0cm前後で、器高6.0cm前後、深さ4.0cm前後、厚み2.0前後の半球形を呈す。すべての資料で口縁近くは火熱によって暗赤色にガラス化し、内面には黒色のカラミがアメ状に付着する。また、図化できなかった小片の資料に銅錆が付着していることが目視で確認できた（写真3）。重さは81が64g、82が80g、83が197g、84が70g、85が18gを測る。鉱滓は椀形の形状を呈し、破片数にして5点、総重量407g出土した。木片や炭化物が大量に付着している。坩堝（取瓶）の口縁近くの暗赤色のガラス化や銅錆の付着などから、一連の資料は銅製品の鋳造関連遺物である可能性が高いと思われる。

写真3　銅錆付着状況（◌内銅錆）

SD 2

86～88は須恵器の杯蓋である。86は口縁部に小さな返りをもつもので、天井部には扁平な宝珠つまみを有す杯蓋である。87は扁平な宝珠つまみを有す杯蓋である。下方に屈曲する口縁部を持ち、口縁部内部に返りが無い。いずれの資料ともつまみは失われている。88は稜が小さく、口縁部はやや外反ぎみに開き、端部は内傾し段を有す。口径は86が18.6cm、87が17.0cm、88が13.0cmを測る。89は須恵器杯身で口径14.0cmを測る。口縁部が内傾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。90・91は灰釉陶器椀である。90は体部に釉が薄くツケガケされる。内面の内湾が弱く、口縁部はやや外反気味である。口径16.0cmを測る。91は高台で底径8.2cmを測る。釉は内面見込みまで、外面は底部設置面まで施されている。92は山茶椀で口径16.0cmを測る。緩やかに内湾する体部を有し、口縁端部はやや先細りになり丸くおさ

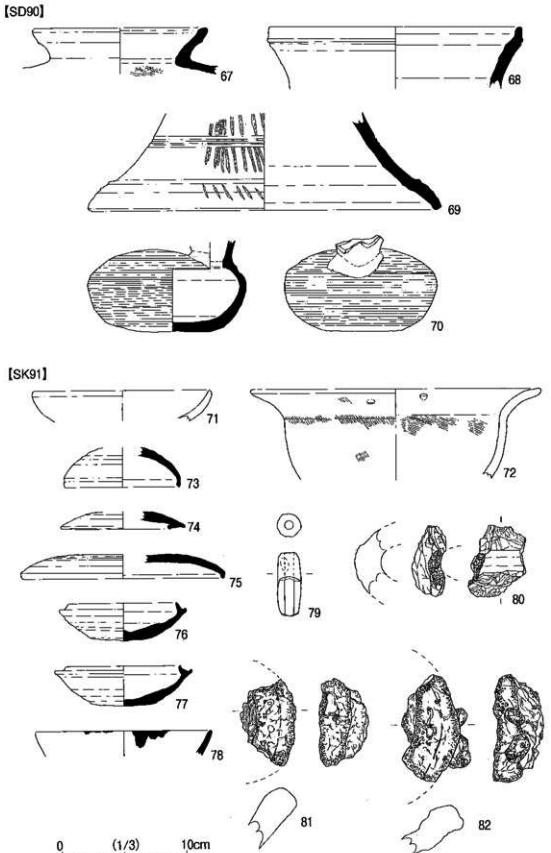


図22　出土遺物実測図（5）

【SK91】

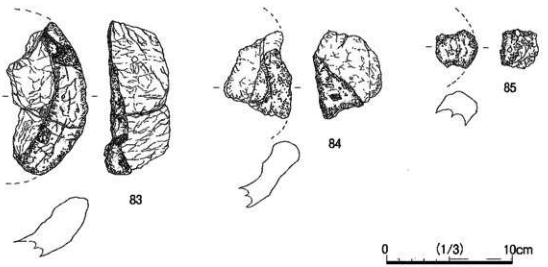


図23　出土遺物実測図（6）

める。93～98は土師質土器皿である。いずれも、偏平な底部から口縁部を短く立ち上がらせるものでその分器高が低い。調整は内外面ともナデが施されている。口径は93・94が8.0cm、95・96が9.0cm を測る。99・100は鉄製品の釘である。99は頭部を欠くが長さ3.6cm、太さ0.5cm、重さ2.0g を測る。100は頭部をやや折り曲げたもので断面はやや楕円形をしている。長さ7.2cm、最大太さ1.2cm、最小太さ0.8cm、重さ15.0g を測る。

瓦だまり1

101～106は須恵器杯蓋である。101～106は扁平な宝珠つまみを有す杯蓋である。101・104以外はつまみが失われている。下方に屈曲する口縁部を持ち、口縁部内部に返りが無い。口径は101が12.3cm、102が13.0cm、103は14.0cm、104が15.0cm、105が16.1cm、106が18.0cm を測る。107・108は須恵器杯身である。立ち上がり部が短く内傾し、底部はやや平坦である。口径は107が11.2cm、108が16.0cm を測る。109は灰釉陶器椀の底部で底径8.2cm を測る。低く、外面下方の稜が不明瞭であるが、三日月高台である。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。釉はツケガケされる。110・111は土師質土器皿である。いずれも、偏平な底部から口縁部を短く立ち上がらせるものでその分器高が低い。調整は内外面ともナデが施されている。口径は110は9.0cm、111が10.0cm を測る。112・113は鉄製品の釘である。112は長さ5.0cm、太さ0.4cm、重さ4.0g を測る。113は頭部をやや折り曲げたもので腐食が著しいが断面方形を呈す。先端は失われているが残存部の長さ4.5cm、最大太さ1.7cm、最小太さ1.0cm、重さ14.0g を測る。芯部分は0.7cm の方形である。

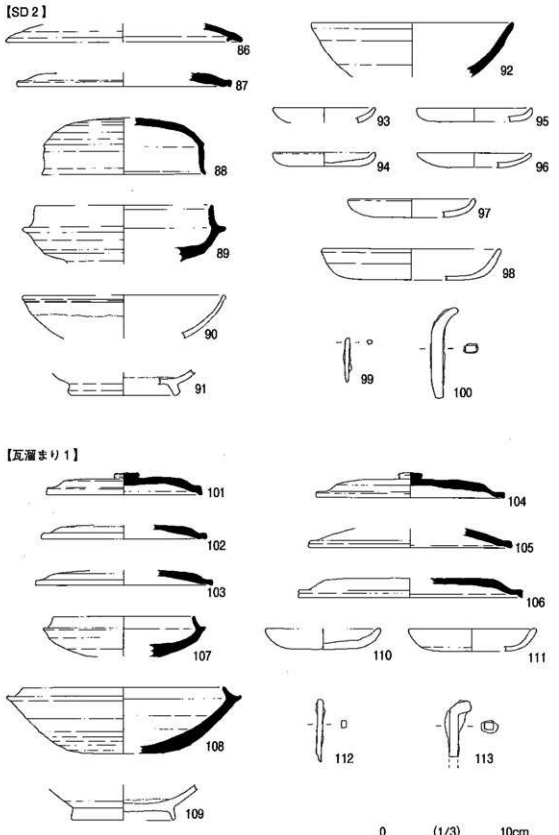


図24　出土遺物実測図（７）

瓦類

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は瓦当紋様などから10類に分類した。A類（114）、B類（115～117）、C類（120・121）、D類（123・124）、E類（125）、F類（126～130）、G類（144～146）、H類（147・148）、I類（149～151）、J類（153）である。出土位置はほとんどが瓦溜まり1かSK91であり、寺院廃絶後の整地の段階で整理されたものが多いと思われる。

軒丸瓦A類（114）

瓦当紋様は周縁索紋の素弁8葉蓮華紋である。資料の遺存状態が悪いため不明確な点が多いが、弁は無子葉で弁央には鎬が入らない。中房は欠われているため詳細は不明である。114はSD90からの出土である。残存部からの復元ではあるが。瓦当径17.0cm前後、中房径3.5cm前後になると思われる。瓦当裏面は指頭圧痕が確認されるためナデが施されたようである。丸瓦部凸面は摩耗のため調整は不明である。焼成はあまく、色調は灰白色である。

軒丸瓦B類（115～117）

瓦当紋様は周縁に重圏紋をめぐらす単弁8葉蓮華紋で、中房には「1＋5」の蓮子を有し、輪郭線で画された花弁に大きな子葉をもち、間弁は三角形状を呈している。瓦当裏面はナデ調整で、丸瓦部凸面もナデ調整である。山田寺式である。115はSK91上層からの出土で、瓦当裏面の下半部には堤状の凸帯は認められなかった。丸瓦部凹面には布目圧痕が残る。瓦当径19.8cm、中房径3.6cmで焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。116はSD90からの出土であるが、踏み返しかと思われるほど、紋様が不鮮明である。瓦当裏面の下半部には堤状の凸帯が若干ではあるが認められる。復元瓦当径20.0cmで焼成は非常にあまく、色調は浅黄橙色を呈す。117はSD90からの出土で、瓦当裏面は剥離している。復元瓦当径19.0cmで焼成はややあまく、色調は灰白色である。組み合い関係は軒平瓦A類、丸瓦A類、平瓦A～E類と組み合うと思われる。

軒丸瓦C類（120・121）

瓦当紋様は、突出の激しい単弁8葉蓮華紋で、連接する間弁の中腹に花弁輪郭線がめぐり、有軸の花弁に輪郭線のある子葉をもつ。3段構成の中房は各段に圏線をもち、十字状の界線がはいる。蓮子は周環をもたず、中房の頂部中心に1個、最下段に19個配置する。外区内縁には密な珠紋帯とその外側を囲む圏線があり、外区外縁は内側に圏線をめぐらせた素紋縁である。外区の圏線は断面が外傾に延びた三角形状になる。湖東式である。120は、瓦溜まり1からの出土で、瓦当裏面はナデ調整で、下半部には堤状の凸帯を有す。丸瓦部凹面には布目圧痕がナデ消されてはいるものの残り、凸面はナデ調整が施されている。丸瓦部の粘土板作りは丸太状内型を用いたようである。瓦当径は最大径17.5cm、最小径16.8cmと瓦当に若干ゆがみがある。中房径は3.0cmで焼成は堅緻で、色調は黄灰色を呈す。121は、SK91上層からの出土で、瓦当裏面はナデ調整で、下半部の堤状凸帯の有無は資料の欠損のため不明である。丸瓦部凹面には布目圧痕がナデ消されてはいるものの残り、凸面にはヘラケズリが施され

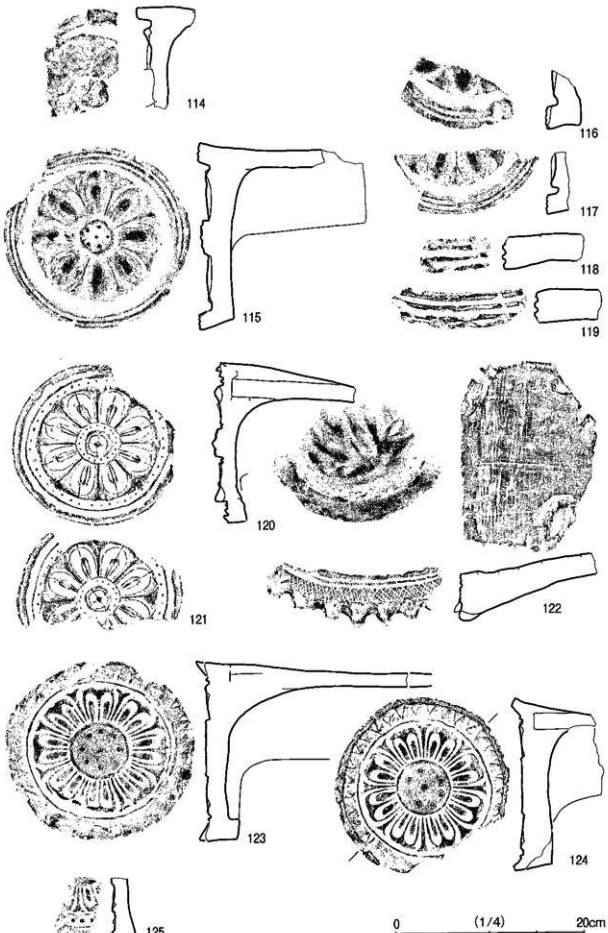


図25　出土瓦実測図（1）

る。丸瓦部の粘土板作りは丸太状内型を用いたようである。瓦当径17.6cm、中房径2.8cmで焼成は堅緻で、色調は灰色を呈す。組合関係は軒平瓦B類、丸瓦A類、平瓦A類～E類と組み合うと思われる。

軒丸瓦D類（123・124）

瓦当紋様は周縁に面違鋸歯文をめぐらす複弁8葉蓮華紋で、中房には「1＋8」の周環のある蓮子を有し中房の外側と周縁の内側にそれぞれ一重の圏線が巡る。川原寺式である。123はSK91上層からの出土で、瓦当裏面はナデ調整で、下半部には堤状の凸帯を有す。凸帯の形成は粘土紐の貼付による。丸瓦部凹面には布目圧痕がナデ消されてはいるものの残り、凸面はタテ方向に面取り状にヘラケズリが施される。瓦当径19.0cm、中房径6.0cmで焼成は堅緻で、色調は浅黄橙色を呈す。124は瓦溜まり1からの出土で、瓦当裏面はナデ調整で、下半部には堤状の凸帯を持たない。伽型を使用した可能性がある。瓦当径は18.5cm、中房径5.7cmで焼成は堅緻で、色調は灰色を呈す。組み合い関係は丸瓦A類、平瓦A～E類と組み合うと思われる。軒平瓦に関しては今回組み合う資料は出土していないが、八坂東遺跡の調査成果より簾状重弧紋が組み合うと思われる。

軒丸瓦E類（125）

資料の遺存状態が悪いため不明確な点もあるが、瓦当紋様は外区内縁に珠文をめぐらす複弁8葉蓮華紋である。外区外縁や中房の状態は不明であるが、花弁の弁長は短い。おそらく藤原宮式系統と思われる。125は瓦溜まり1からの出土である。瓦当裏面の下半部には堤状の凸帯が若干ではあるが認められる。小片のため瓦当径は復元できないが、焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。組み合い関係は丸瓦A類、平瓦A～E類と組み合うと思われる。

軒丸瓦F類（126～130）

瓦当紋様は外区外縁素紋で外区内縁に圏線をめぐらす複弁8葉蓮華紋で、中房には「1＋8」の蓮子を有す。弁の先端は尖りぎみで弁央界線はY字状を呈す。全体的に彫りは浅く平面的である。瓦当裏面はナデ調整で、下半部の堤状の凸帯はない。126は瓦溜まり1からの出土で瓦当径16.0cm、中房径5.5cmで焼成は堅緻で、色調は黄灰色を呈す。127は包含層からの出土で瓦当径15.7cm、中房5.6cmで焼成はややあまく、色調は灰黄色を呈す。128は瓦溜まり1からの出土で復元瓦当径16.0cm、中房は5.5cmで焼成は堅緻、色調は灰黄色を呈す。129は瓦溜まり1からの出土で復元瓦当径16.0cm、復元中房径5.5cmで焼成は堅緻、色調は灰白色を呈す。130は瓦溜まり1からの出土で復元瓦当径15.5cm、復元中房径5.3cmで焼成はややあまく、色調は浅黄橙色を呈す。組み合い関係は軒平瓦C・D類、丸瓦B類、平瓦F類と組み合うと思われる。

軒丸瓦G類（144～146）

瓦当紋様は外区外縁に線鋸歯紋を、外区内縁に珠文をめぐらす単弁16葉蓮華紋で、中房には「1＋6」の蓮子を有す。瓦当裏面の下半部に堤状の凸帯を確認できる資料はない。伽型を使用してる可能性がある。144は瓦溜まり1からの出土で瓦当裏面はナデ調整を、丸瓦と

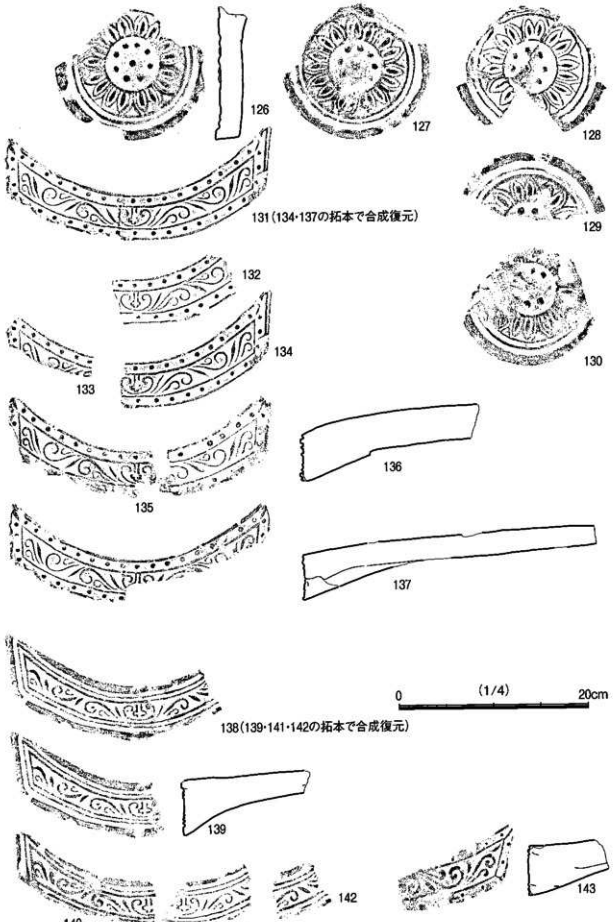

126
127
128
131(134·137の拓本で合成復元)
129
132
130
133
134
135
136
137
0
(1/4)
20cm
138(139·141·142の拓本で合成復元)
139
140
141
142
143

図26 出土瓦実測図（2）

の接合面の凹部は工具のようなものでナデられており、丸瓦部凸面には粘土との接合をよくするための格子状のキザミ目が施されている。瓦当径17.0cm、中房径3.1cmで焼成はややあまく、色調は灰色を呈す。145はSK91上層からの出土で瓦当裏面はヘラケズリと工具のようなものでナデられている。復元瓦当径17.5cm、中房径3.0cmで焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。146は瓦溜まり1からの出土で瓦当裏面はナデ調整が施されている。復元瓦当径17.0cm、復元中房径3.0cmで焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。組み合い関係は丸瓦B類、平瓦F類と組み合うと思われる。また、軒平瓦に関しては、平城宮式であるC・D類と組み合う可能性がある。

軒丸瓦H類（147・148）

瓦当紋様は外区外縁に線鋸歯紋を、外区内縁に珠紋をめぐらす単弁16葉蓮華紋で、中房には「1＋4＋8」の蓮子を有し中房の外側に一重の圏線が巡る。弁央にはわずかに鏑があり、弁の輪郭は細突線で表す。瓦当裏面は縄目叩きが施され、下半部に堤状の凸帯はない。また、丸瓦と瓦当の接合部を含む凸面は、縄目叩きが施されている。147はSK91下層からの出土で丸瓦部凹面は布目圧痕を残し、桶状内型を使用したようである。瓦当径18.8cm、中房径6.4cmで焼成堅緻、色調灰白色を呈す。148は瓦溜まり1からの出土で、瓦当と丸瓦が接合していた剥離面を観察すると、布目圧痕が残っており、丸瓦が桶状内型を使用したものであることが確認できた。復元瓦当径19.0cm、中房径6.1cmで焼成ややあまく、色調は浅黄橙色を呈す。組み合い関係は丸瓦B類、平瓦F類と組み合うと思われる。また、軒平瓦に関しては、平城宮式であるC・D類と組み合う可能性がある。

軒丸瓦I類（149～151）

瓦当紋様は外区外縁に線鋸歯紋を、外区内縁に珠紋をめぐらす単弁16葉蓮華紋で、外区外縁の幅が狭く。弁央にはわずかに鏑があり、弁の輪郭は突線で表す。中房は失われているため、形態は不明である。瓦当裏面はナデが施され、下半部に堤状の凸帯はない。149は瓦溜まり1からの出土である。枷型を使用した可能性がある。復元瓦当径18.0cmで焼成はややあまく、色調は黄灰色を呈す。150はSK91上層からの出土で復元瓦当径20.0cmで焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。151はSK91上層からの出土で復元瓦当径19.0cmで焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。組み合い関係は丸瓦B類、平瓦F類と組み合うと思われる。また、軒平瓦に関しては、平城宮式であるC・D類と組み合う可能性がある。

軒丸瓦J類（153）

瓦当文様は外区外縁に圏線を、外区内縁に珠文をめぐらす単弁8葉蓮華紋で、蓮弁には子葉を持っている。中房は失われているため全容はつかめないが、中房の外側には一重の圏線がめぐり蓮子は周環をもたない。蓮子の数は不明である。瓦当裏面はナデが施されている。153は瓦溜まり1からの出土で復元瓦当径は小片のため判断がつきづらいが22.0cm前後である。焼成はややあまく、色調は黄灰色を呈す。組み合い関係は丸瓦B類、平瓦F類と組み合うと思われる。また、軒平瓦に関しては、平城宮式であるC・D類と組み合う可能性がある。

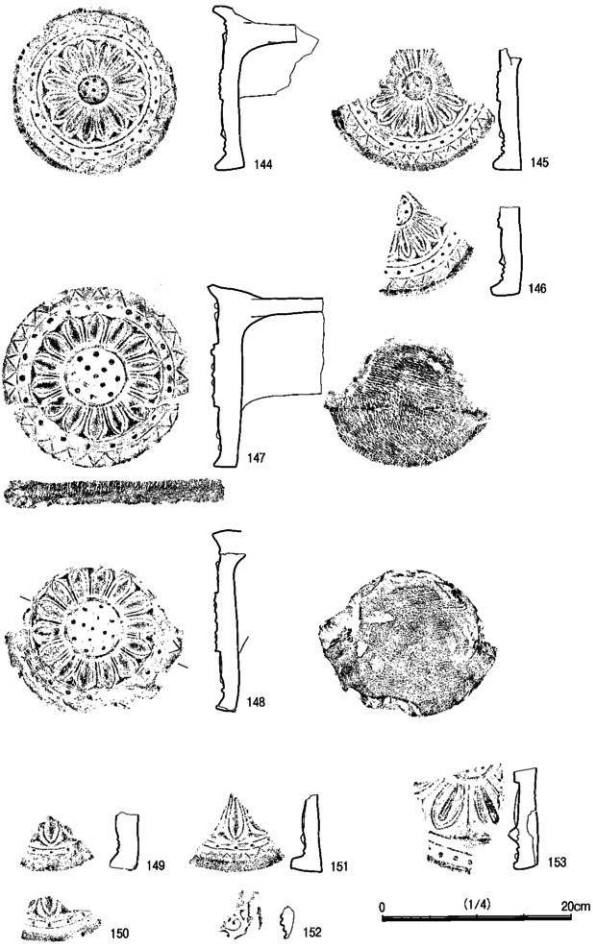


図27 出土瓦実測図（3）

2. 軒平瓦

軒平瓦は瓦当紋様などから5類に分類した。A類（118・119）、B類（122）、C類（131～137）、D類（138～143）、E類（152）である。出土位置は軒丸瓦と同じく、ほとんどが瓦溜まり1かSK91であり、寺院廃絶後の整地の段階で整理されたものが多いと思われる。

軒平瓦A類（118・119）

無顎式の4重弧紋で118は瓦当部の付加粘土が厚い曲線顎式である。118は瓦溜まり1からの出土で全体に摩耗が激しく、調整の判断がつかないが、凹面の布目は確認できる。瓦当厚3.3cmで焼成はあまく、色調は灰白色を呈す。119は瓦溜まり1からの出土で瓦当厚3.4cmを測る。焼成は堅緻で、色調は黄灰色を呈す。凸面は縦位のヘラケズリを施し、凹面は布目の圧痕をそのまま残している。組み合い関係は軒丸瓦B類、丸瓦A類、平瓦A～E類と組み合うと思われる。

軒平瓦B類（122）

指圧波状紋軒平瓦である。今回は122が唯一の出土である。122によると、圏線によりわけられた内外区の外区は幅の狭い祖紋で、内区は斜格子状の文様を施す。この紋様はヘラの先端を使い、右上がりの沈線を連続して施したのち、左上がりの沈線を連続して施して×状の紋様を刻むのである。その後、瓦当下端部に凸面から指圧を施し波状とする。曲線顎をなし、突面はナデ、凹面は布目圧痕を残している。瑞東式である。瓦当厚は最大5.0cm、最小4.0cmで焼成はあまく、色調は灰白色を呈す。瓦溜まり1からの出土である。組み合い関係は軒丸瓦C類、丸瓦A類、平瓦A～E類と組み合うと思われる。

軒平瓦C類（131～137）

均整唐草紋軒平瓦である。131は、134と137の拓本を使い合成復元したものである。それによると、花頭形の垂飾りを上向きのC字形中心葉で囲む。唐草は左右対称の3回反転で、外区内縁は圏線を配し、外区外縁に珠文を巡らせる。平城宮6664D型式、6665A型式に類似するが両者とも細部が異なっており同笵ではない。132は瓦溜まり1からの出土で、曲線顎で凸面ナデ、凹面布目圧痕をナデ消している。瓦当厚4.8cmで焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。133は瓦溜まり1からの出土で、瓦当下端部が失われているため顎の状態は不明であるが、おそらく曲線顎である。凸面はナデ、凹面は横方向のヘラケズリが施されている。瓦当厚は不明である。焼成はややあまく、色調は灰白色である。134は瓦溜まり1からの出土で、曲線顎で凸面ナデ、凹面布目圧痕後ナデている。瓦当厚4.8cmで焼成は堅緻、色調は灰白色を呈す。135は瓦溜まり1からの出土で、曲線顎で凸面ナデ、凹面は布目圧痕が残る。瓦当厚4.9cmで焼成は堅緻、色調は黄灰色を呈す。136はSK91上層からの出土で、段顎で凸面ナデ、凹面もナデが施される。瓦当厚4.8cmで顎長7.3cm、焼成は堅緻で、色調はにぶい黄橙色を呈す。137は瓦溜まり1からの出土で、曲線顎で凸面ナデ、凹面布目圧痕を残すが一部ナデが施されている。凸面の顎部分の一部が剥離しているが、その剥離面より、縄目タタキが確認できる。付加粘土を付ける前の平瓦の凸面の調整と考えられる。瓦当厚は4.7cmで焼成は堅

緻、色調は灰色を呈する。組み合い関係は軒丸瓦Ｆ類、丸瓦Ｂ類、平瓦Ｆ類と組み合うと思われるが、同じ平城宮式の軒丸瓦Ｆ類は、軒平瓦に比べて明らかに点数が少なく、それらを勘案すると、あるいは軒丸瓦Ｇ・Ｈ・Ｉ類とも組み合う可能性がある。

軒平瓦Ｄ類（138～143）

均整唐草紋軒平瓦である。138は、139と141と142の拓本を使い合成復元したものである。それによると、花頭形の垂飾りを上向きのＣ字形中心葉で囲む。唐草は左右対称の３回反転で、外区内縁は圏線を配す。平城宮式6663型式に類似するものの細部が異なる。139は瓦溜まり１から出土した。曲線顎で凸面ナナメ方向のヘラケズリ、凹面ヨコ方向のナデが施されている。瓦当厚5.7cmで焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。140は瓦溜まり１から出土した。曲線顎で凸面縄目叩き、凹面布目圧痕が残る。瓦当厚4.5cmで焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。141は瓦溜まり１から出土した。曲線顎で凸面縄目叩きで、凹面はほとんど残存部がないため調整は不明である。瓦当厚5.2cmで焼成はややあまく、色調は灰白色である。142は瓦溜まり１から出土した。曲線顎である。摩耗が激しいため調整が判断できないが、凸面に一部ヘラケズリを確認することができた。瓦当厚5.1cmで焼成はあまく、色調は灰白色である。143は瓦溜まり１から出土した。曲線顎である。凸面、凹面ともナデ調整である。瓦当厚5.1cmで焼成はあまく、色調は灰白色である。組み合い関係は軒丸瓦Ｆ類、丸瓦Ｂ類、平瓦Ｆ類と組み合うと思われる。また、上記にも記したが、軒丸瓦Ｇ・Ｈ・Ｉ類とも組み合う可能性がある。

軒平瓦Ｅ類（152）

瓦当の細片152のみの出土であるため詳細は不明であるが、均等唐草紋軒平瓦と思われる。Ｃ類、Ｄ類と違い外区の界線の外に、珠紋などは巡らない。焼成はあまく、色調は浅黄橙色を呈す。瓦溜まり１からの出土である。組み合い関係は丸瓦Ｂ類、平瓦Ｆ類と組み合うと思われる。

3. 丸瓦

丸瓦の狭端縁部の形態から２類に分類した。Ａ類（154）、Ｂ類（155）である。凸面の叩き締めなどからさらに分類が可能と思われる。

丸瓦Ａ類（154）

行基式丸瓦である。154は瓦溜まり１からの出土で全長37.5cm、残存部の最広端部幅16.0cm、最狭端部幅12.5cm、厚さ1.7cm～2.0cmを測る。凸面縄目叩き、凹面布目圧痕を残す。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈す。組合関係は軒丸瓦Ａ～Ｅ類、軒平瓦Ａ･Ｂ類、平瓦Ａ～Ｅ類と組み合うと思われる。

丸瓦Ｂ類（155）

玉縁式丸瓦である。155は瓦溜まり１からの出土で残存部全長22.8cm、残存部矢筒長16.9cm、矢筒幅14.1cm、玉縁長5.9cm、玉縁幅10.6cmを測る。凸部は縄目叩きの後、丁寧にナデ消されている。凹部は布目圧痕が明瞭に残る。また、玉縁部と丸瓦部の段差の断面にカ

キメ状の擦痕が確認できる。焼成はややあまく、色長は灰白色を呈する。組み合い関係は軒丸瓦Ｆ～Ｊ類、軒平瓦Ｃ・Ｄ類、平瓦Ｆ類と組み合うと思われる。

4. 平瓦

平瓦は凸面の叩き締め圧痕などから６類に分類した。Ａ類（156～158）、Ｂ類（159･160）、Ｃ類（161・162）、Ｄ類（163）、Ｅ類（164・165）、Ｆ類（166）である。

平瓦Ａ類（156～158）

凸面に斜格子叩きをまばらに施した後、それを一部ナデ消す。桶巻き作りである。156と157では回転を利用したナデを施している。凹面は布目圧痕をそのまま残す。156･157は瓦溜まり１からの出土で焼成は堅緻、色調は暗灰色である。158は瓦溜まり１からの出土で焼成はややあまく、色調は灰白色である。組み合い関係は軒丸瓦Ａ～Ｅ類、軒平瓦Ａ･Ｂ類、丸瓦Ａ類と組み合うと思われる。

平瓦Ｂ類（159・160）

凸面は平行叩きの後、斜格子叩きを施す。凹面は布目圧痕をそのまま残す。桶巻き作りである。159は瓦溜まり１からの出土で焼成は堅緻、色調は灰白色である。160は瓦溜まり１からの出土で焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。組み合い関係は軒丸瓦Ａ～Ｅ類、軒平瓦Ａ・Ｂ類、丸瓦Ａ類と組み合うと思われる。

平瓦Ｃ類（161・162）

凸面は平行叩きで凹面は布目圧痕をそのまま残す。叩き目の幅は0.3cmを測る。桶巻き作りである。161は瓦溜まり１からの出土で平行叩きのみで焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈する。162は瓦溜まり１からの出土で、平行叩きの後に端面よりに回転を利用したヘラケズリを施している。焼成は堅緻で、色調はにぶい黄橙色を呈す。組み合い関係は軒丸瓦Ａ～Ｅ類、軒平瓦Ａ・Ｂ類、丸瓦Ａ類と組み合うと思われる。

平瓦Ｄ類（163）

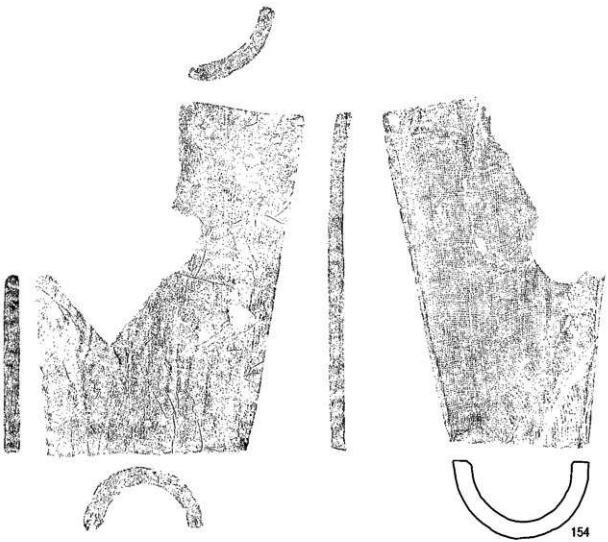
凸面はヘラケズリの後、部分的に斜格子叩きを施す。凹面は布目圧痕をそのまま残す。桶巻き作りである。焼成はあまく、色調は灰白色を呈す。瓦溜まり１からの出土である。組み合い関係は軒丸瓦Ａ～Ｅ類、軒平瓦Ａ・Ｂ類、丸瓦Ａ類と組み合うと思われる。

平瓦Ｅ類（164・165）

凸面はヘラケズリの後、部分的に長方形状の格子叩きを施す。凹面は布目圧痕をそのまま残す。桶巻き作りである。両資料とも凹面に布の綴じ合わせ目が見られ、焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。どちらも瓦溜まり１からの出土である。組み合い関係は軒丸瓦Ａ～Ｅ類、軒平瓦Ａ・Ｂ類、丸瓦Ａ類と組み合うと思われる。

平瓦Ｆ類（166）

凸面は縄目叩きで、凹面は布目圧痕をそのまま残す。一枚作りである。今回出土した凸面縄目叩きの平瓦に桶巻き作りのものは確認できなかった。しかし、斐斗瓦が、凸面縄目叩きで桶巻き作りなので、おそらく凸面縄目叩きで桶巻き作りの平瓦は竹ヶ鼻廃寺の資料の中に



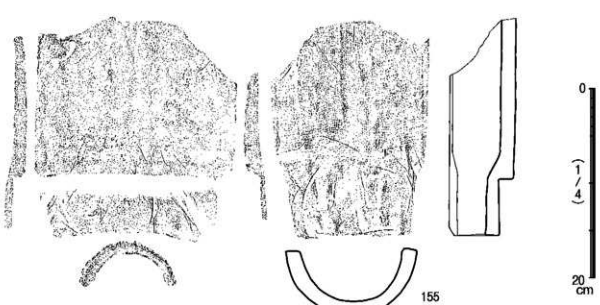


図28　出土瓦実測図（4）

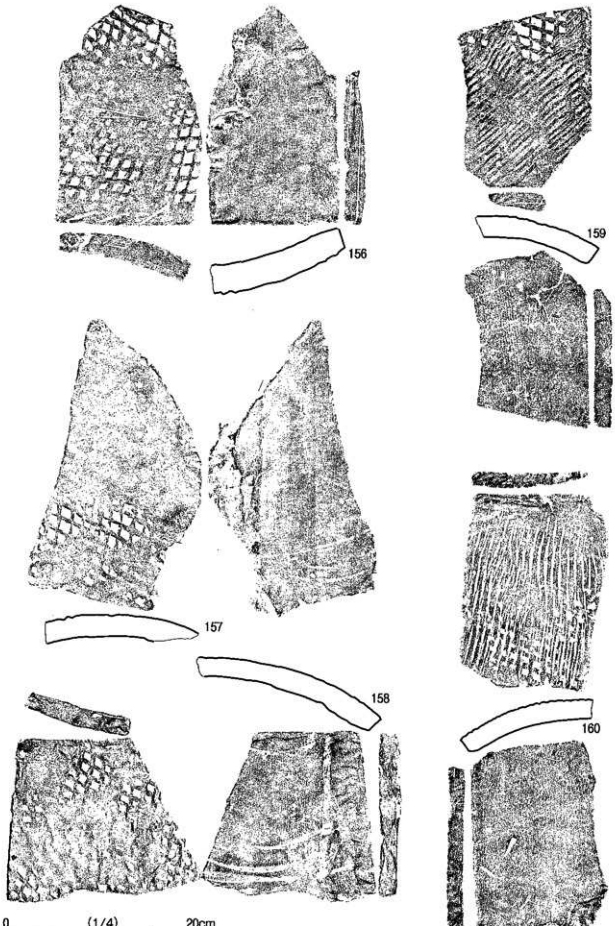


図29　出土瓦実測図（5）

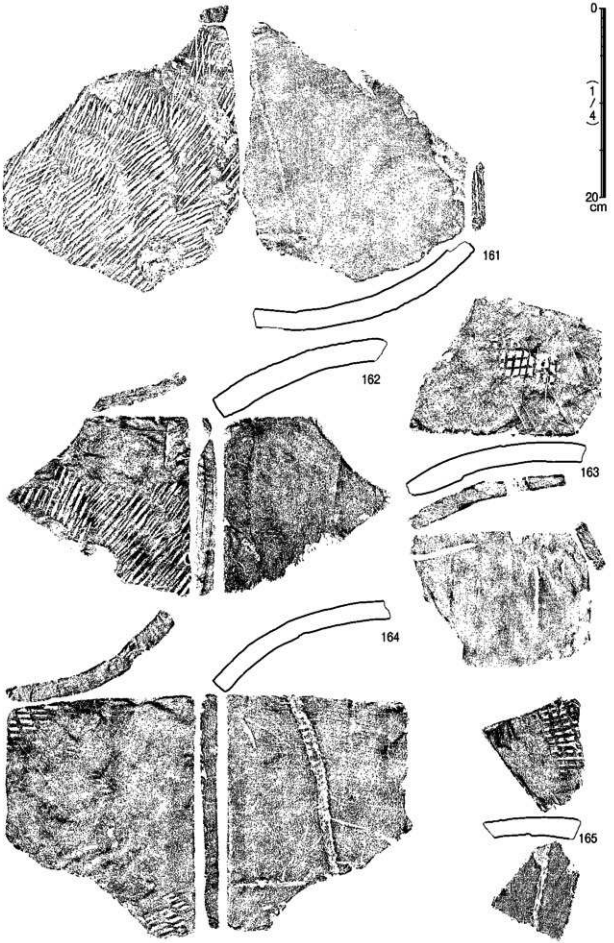


図30 出土瓦実測図（6）

図31　出土瓦実測図（7）

存在すると思われる。166は資料の残りがよく法量が計測できるが、それによると全長41.0cm、残存部の最大広端部幅23.0cm、狭端部幅22.0センチを測る。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。瓦溜まり1からの出土である。組み合い関係は軒丸瓦F～J類、軒平瓦C・D類、丸瓦B類と組み合うと思われる。

5. 熨斗瓦（167～169）

凸面縄目叩きで、凹面布目圧痕をそのまま残す。桶巻き作りである。167は瓦溜まり1からの出土で幅8.7cm、厚さ1.9cm、焼成は堅緻で、色調は灰色である。168は瓦溜まり1からの出土で幅9.1cm、厚さ2.2cm、焼成ややあまく、色調は灰白色である。169は瓦溜まり1からの出土で長さ20.2cm、幅11.0cm、厚さ2.2cm、焼成はややあまく、色調は灰白色を呈す。

〔参考文献〕
上原真人　1984「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号
近藤喬一　1982「瓦の笵と瓦当」『考古学論集－小林行雄博士古希記念論文集－』
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1995『八坂東遺跡』
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　2001『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
山崎信二　1993「桶巻作り軒平瓦の製作工程」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』

Ⅳ　おわりに

竹ヶ鼻廃寺4次調査の調査結果については前章までに報告したとおりである。今回の調査では、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。本報告では、それをⅠ～Ⅳ期とし、各期ごとに事実報告を行った。以下に各時代の調査成果と検討課題を簡単に整理し、まとめにかえたい。

【Ⅰ期】

掘立柱建物3棟（SB 1～3）を中心に、古墳時代以前の遺構・遺物を検出した。これらの遺構・遺物は当地に寺院が建立される前に広がっていた集落に伴うものであろう。寺院建立以前の集落の広がりは、これまでの1～3次調査においても確認されており、今回の調査でもそれを追認することができた。これまでの1～4次調査成果より、当期の集落は、古墳時代前期より寺院が建立される直前まで連綿と営まれていたようである。しかし、2次調査において、弥生時代前期後半の遺物が竪穴式住居の床面から出土しており、あるいは古墳時代前期以前にも集落が広がっていた可能性もある。さて、今回の調査では当期の遺構・遺物の分布にひとつの特徴が認められた。寺域の東境を画する区画施設と考えられるSD 1を境に、当期の遺構はその東側に分布が偏っており、寺域と想定される西側では、その分布が極端に希薄になるのである。この寺域と想定される範囲での遺構・遺物の希薄さは、寺院建立に際して大規模な整地が行われた可能性を示唆する。その際、それまでの集落の移転をも

伴っていた可能性がある。

【Ⅱ期】

白鳳期と考える当期の遺構は決して多くなかった。しかし、上記でもふれたが、寺域の東境を画する区画施設と考えられるSD１と、その機能を踏襲したと考えられるSA１を確認したことが大きな成果である。これまでの調査を含めても、初めての寺院関連の遺構となる。しかし、その存続時期の短さ、遺構が非常に浅いこと、北側に延びた先の道路拡張部分でSD１の続きを確認できていないことなど、今後の検討課題も明らかになった。後者２つの課題については、本報告の中では、地形が下がっていく調査区北西側の整地土との関係で、SD１周辺はその整地に際して大規模に削られたためという解釈をおこなったが、今後も引き続き慎重に検討していく必要があると考えている。このようにさまざまな検討課題があるが、いずれにせよこの遺構を境に、東側ではそれ以前の遺構・遺物が、西側ではそれ以後の遺構・遺物の分布が高まるという傾向が読み取れ、調査区全体の評価にもかかわる重要遺構である。その他ではSD13から埴輪が出土したことも大きな成果の一つである。近辺に古墳が存在した可能性を示唆するとともに、寺院建立の母体となる勢力の存在をも想定する資料である。

【Ⅲ期】

奈良時代と考える当期は、今回の調査では最も遺構・遺物の密度が高かったと言える。分布は、調査区全域で確認できるものの、やはりSD１以西が高い。SD１以西で、SD１と方向軸を同じくする掘立柱建物２棟（SB５・６）を確認した。礎石もなく、規模も決して大きいとは言えないため寺院関連とは考えられないものの、建物軸との関係より３次調査で検出した掘立柱建物群との関係が考えられる。また、SD90、SK91からは豊富に遺物が出土したが、やはり特筆されるのはSK91から出土した銅製品の鋳造関連遺物であろう。その出土状況より廃棄されたものであるが、近辺に工房が存在した可能性が高いと思われる。工房の時期は不明だが、SK91の時期を下限とすることは確かである。当期の遺構は、あるいは３次調査で確認された古代の郡役所（郡衙）関連の遺構との関係が深いかもしれないが、この点については今後慎重に検討していく必要があると思われる。

【Ⅳ期】

平安時代後半～中世前期と考える時期で、灌漑用水路（SD２）や畦畔遺構１、瓦溜まり１など、耕作に伴う土地の整理や開発の遺構が確認された。土層断面などより、これ以降当地は、耕作地・畑地として現代まで利用されてきた様子を確認することができた。古墳時代前期より集落が広がり、古代寺院や古代の郡役所（郡衙）関連の遺構など、常に周辺地域の中心地を担ってきた当地も、この時期を境に大きな開発もなくなり、静かな耕作地・畑地として現代にいたったのである。

このように、４時期の遺構・遺物が検出でき、多くの成果を得ることができた調査であっ

た。しかし、新たな課題や解決できていない課題も多く残っている。調査前から、寺院と3次調査で検出された古代の郡役所（郡衙）関連の遺構との関係が不明確であったが、今回の調査でもその課題を解消することはできなかった。また、寺院の伽藍が検討できるような遺構も確認できなかったが、軒丸瓦10類、軒平瓦5類など豊富な瓦資料が出土した。これらの検討を通して竹ヶ鼻廃寺の実態に迫っていくことも大きな課題であろう。これらの課題を含め、今回の事実報告をもとに、今後は関連遺跡・資料の蓄積を行ない調査・検討をおこなっていく必要がある。

〔参考文献〕

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1995『八坂東遺跡』

彦根市　2007『新修彦根市史』第1巻通史編　古代・中世

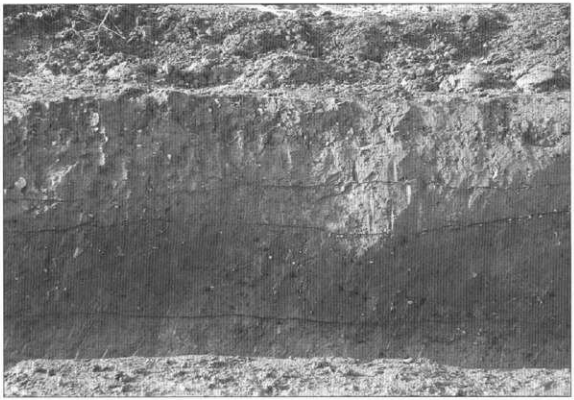
彦根市教育委員会　1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集

彦根市教育委員会　1993『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第21集

彦根市教育委員会　1996『竹ヶ鼻廃寺発掘調査現地説明会資料』

調査前風景〔東より〕

調査区全景〔南東より〕



基本土層〔柱状図3地点：南東より〕

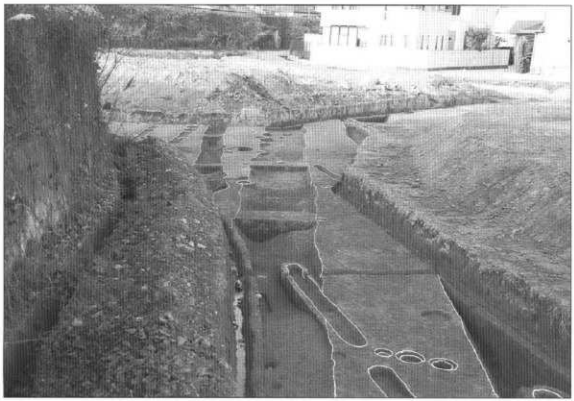
掘立柱建物（SB1）〔東より〕

柱穴内（P39）遺物出土状況〔南より〕

掘立柱建物（SB 2）〔北より〕

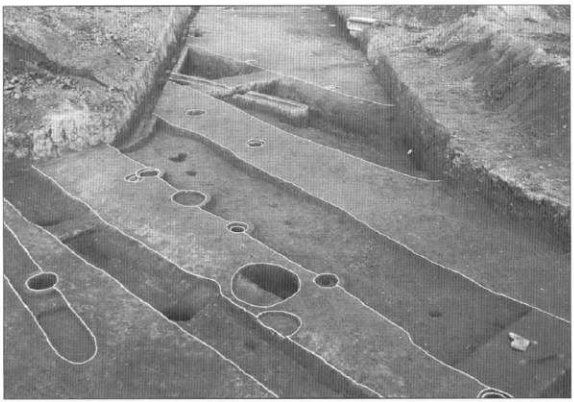
掘立柱建物（SB 3）〔北より〕

土坑（SK88）内遺物出土状況〔北より〕



溝（SD 1）〔南より〕

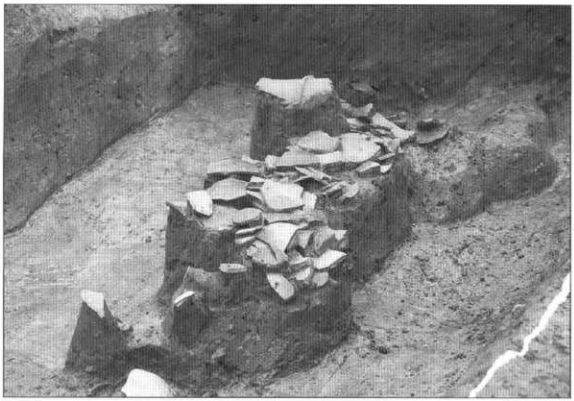
溝（SD 1）〔北より〕



溝（SD 1・2）・柵（SA 1）〔南西より〕

溝（SD13）〔西より〕

図版七



溝（SD13）内遺物出土状況〔東より〕

掘立柱建物（SB 5）〔西より〕

掘立柱建物（SB 6）〔西より〕

北側道路拡張区全景〔南東より〕

図版九

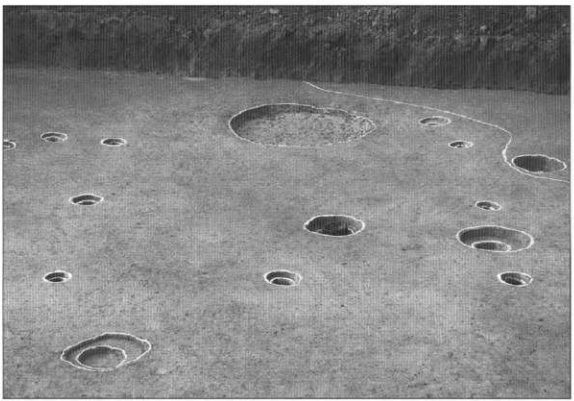
溝（SD90）・土坑（SK91）〔西より〕

土坑（SK91）土層断面〔西より〕

土坑（SK91）内瓦出土状況
〔南東より〕

土坑（SK91）内坩堝
（取瓶）出土状況〔西より〕

土坑（SK91）内瓦出土状況
〔北西より〕



掘立柱建物（SB 4）〔北東より〕

掘立柱建物（SB 7）〔北西より〕

溝（SD 2）土層断面
〔南東より〕

溝（SD 2）〔南より〕

瓦溜まり1〔西より〕

瓦溜まり1内瓦出土状況
〔南西より〕

瓦溜まり1内瓦出土状況
〔南西より〕

畦畔遺構1土層断面
〔西より〕

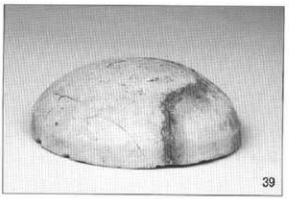
6
SK88

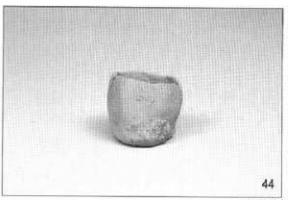
19
SD13

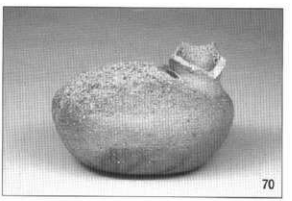
23
SD13

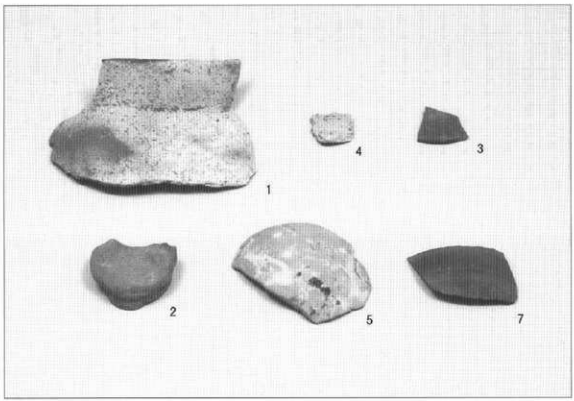
25
SD13

28
SD13

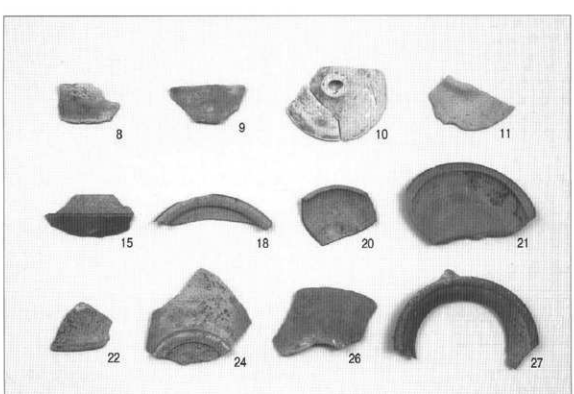

39
SD10


44
SD90

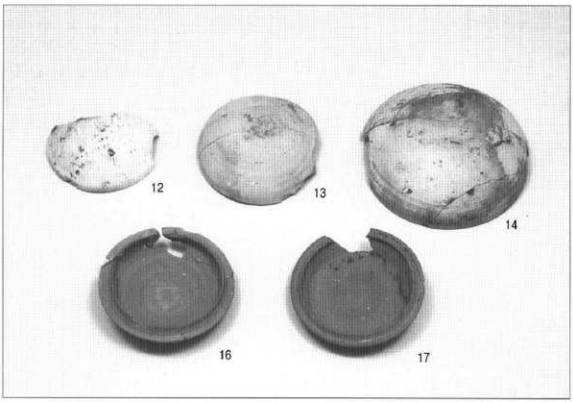

70
SD90



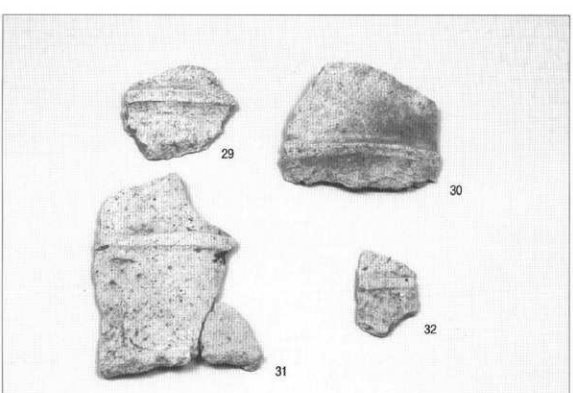
SB 1 (P39)・SD12・SB 2 (P45)・SK43・SK88



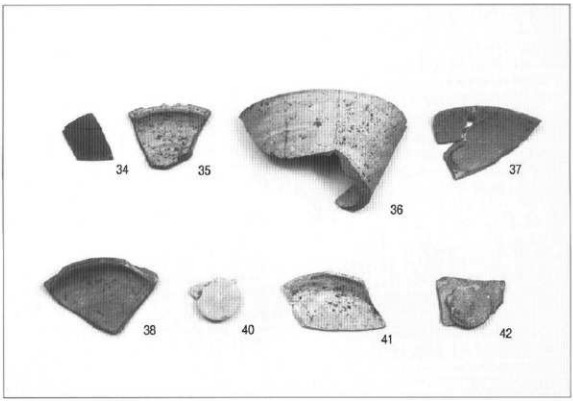
SD13



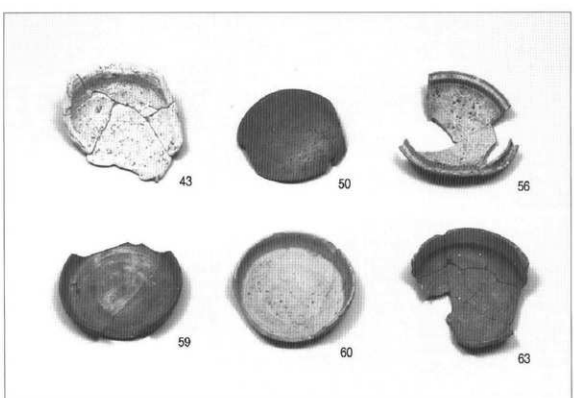
SD13



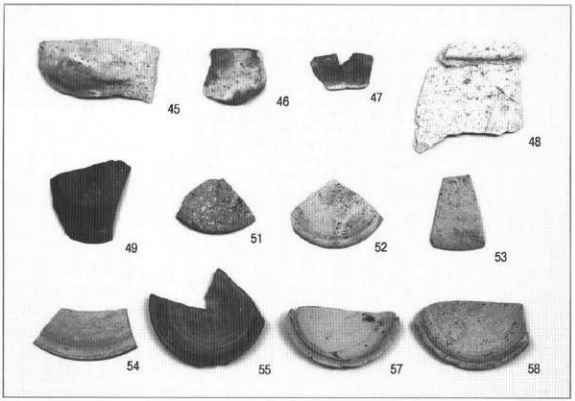
SD13



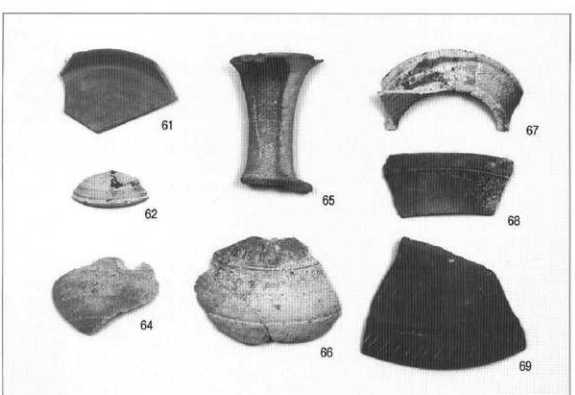
SD 1 ・SK 7 ・SK41 ・SD60



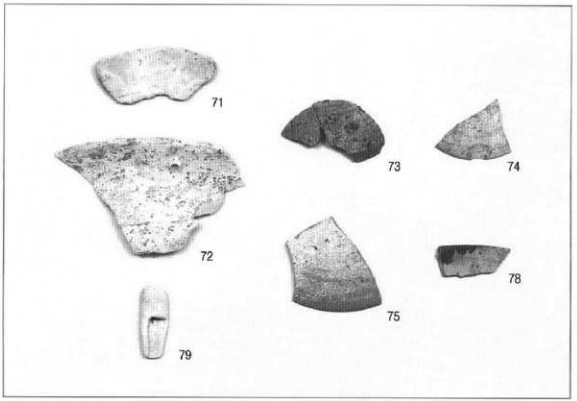
SD90



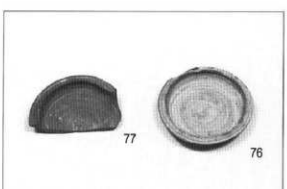
SD90



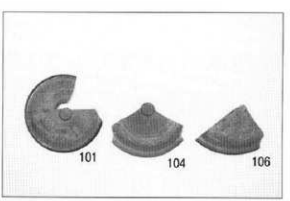
SD90



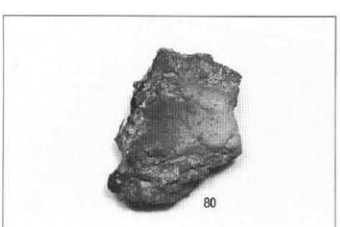
SK91



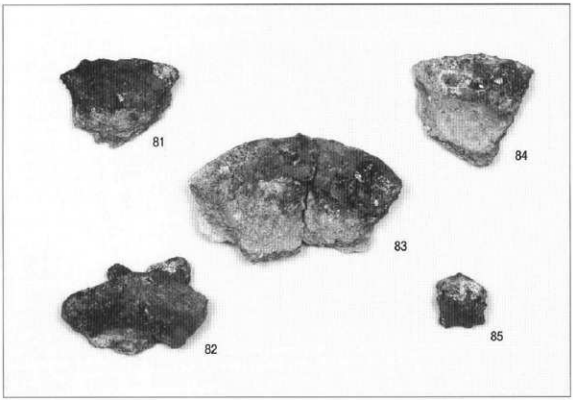
SK91



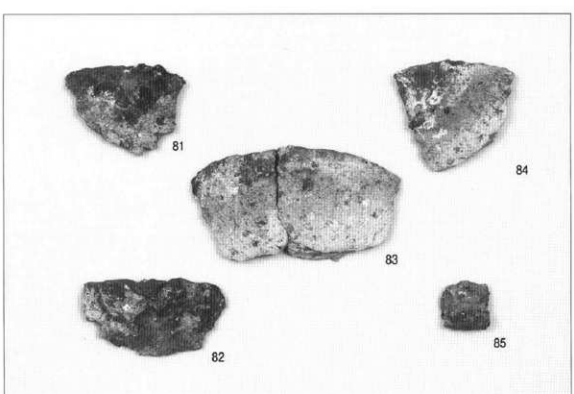
瓦溜まり1



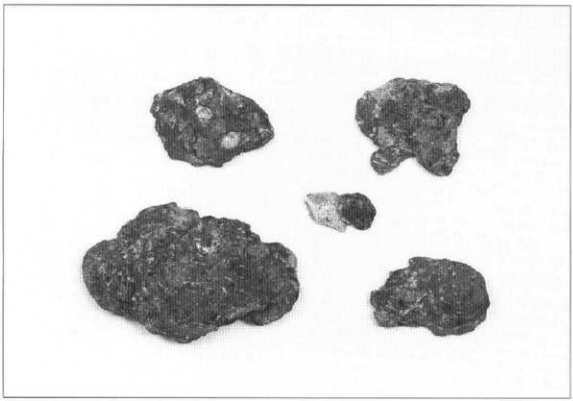
SK91



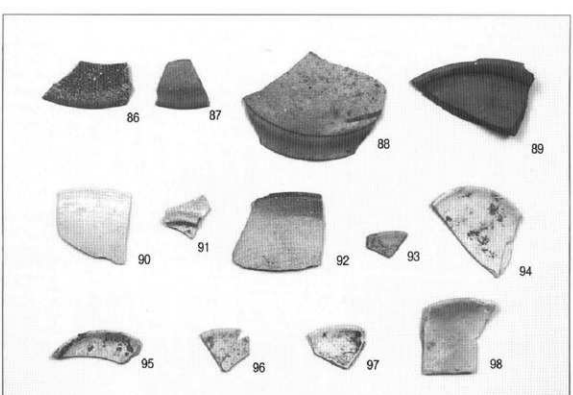
SK91坩堝（取瓶）内面



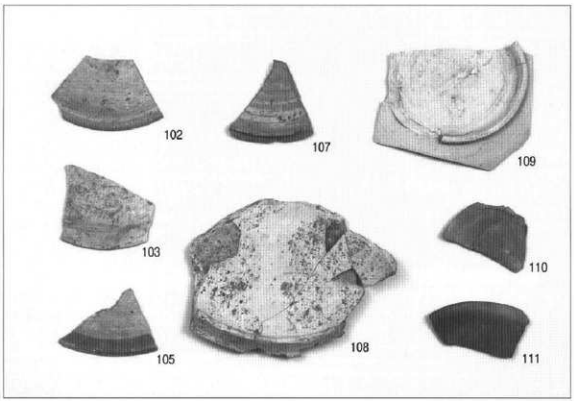
SK91坩堝（取瓶）外面



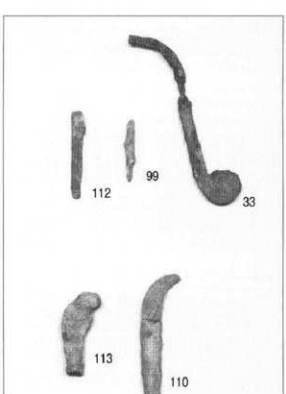
SK91鉱滓



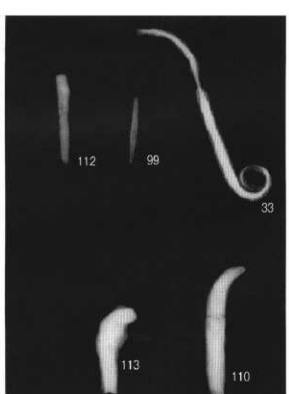
SD 2



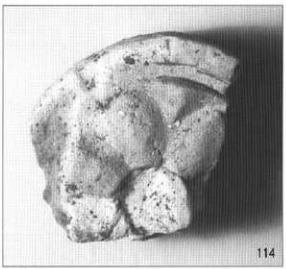
瓦溜まり1



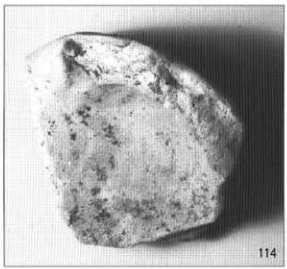
SD 2・SD13・瓦溜まり1　鉄製品



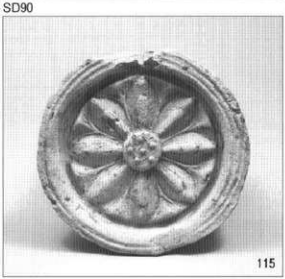
鉄製品（X線写真）



SD90

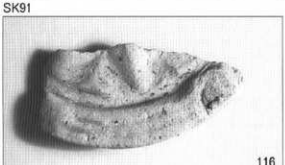


SD90

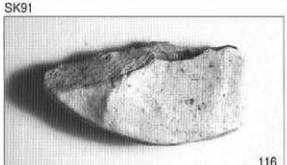


SK91

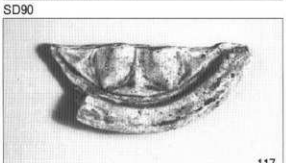
SK91



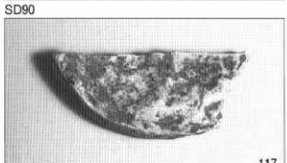
SD90



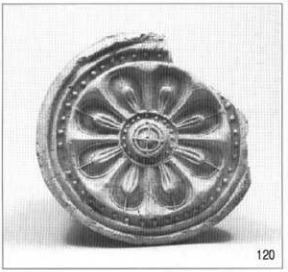
SD90



SD90

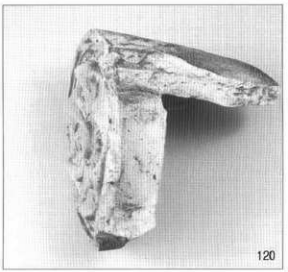


SD90

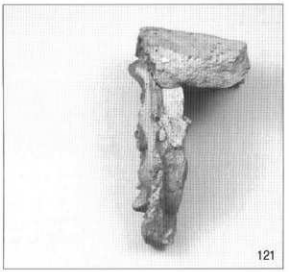


瓦溜まり1

瓦溜まり1

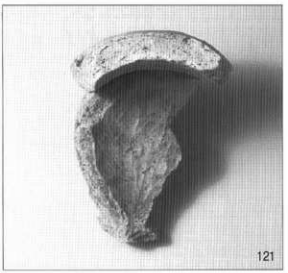


瓦溜まり1



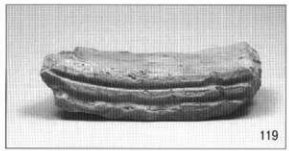
SK91

SK91



SK91

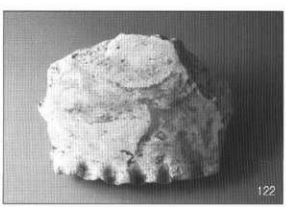
瓦溜まり1



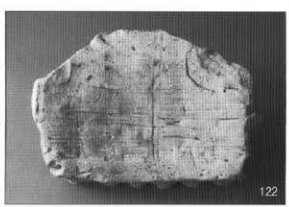
瓦溜まり1

瓦溜まり1

瓦溜まり1



瓦溜まり1

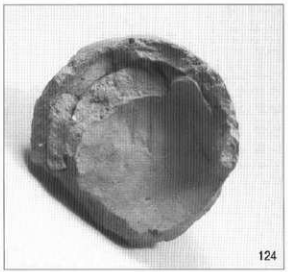


瓦溜まり1

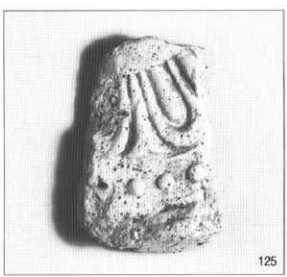
SK91

SK91

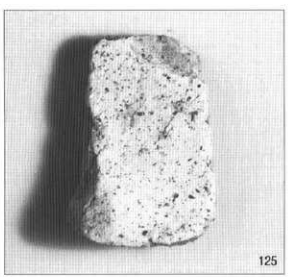
瓦溜まり1



瓦溜まり1



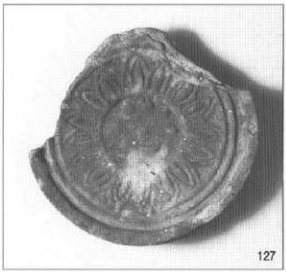
瓦溜まり1



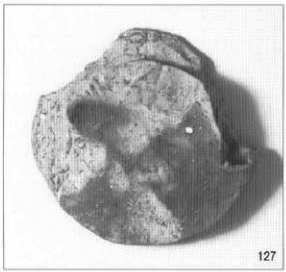
瓦溜まり1

瓦溜まり1

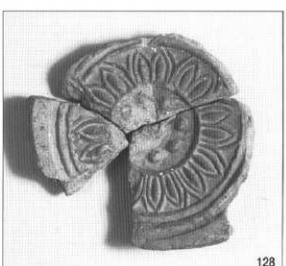
瓦溜まり1



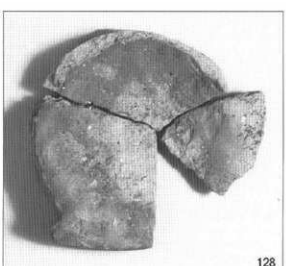
包含層



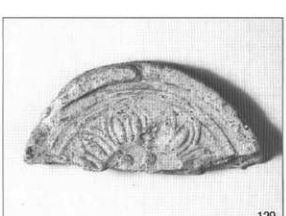
包含層



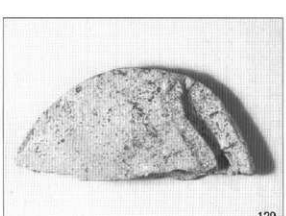
瓦溜まり1



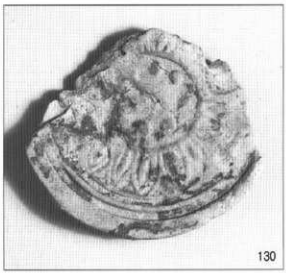
瓦溜まり1



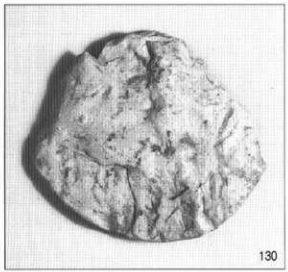
瓦溜まり1



瓦溜まり1



瓦溜まり1



瓦溜まり1

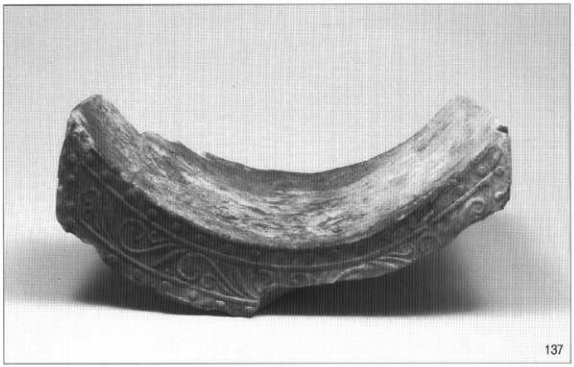
瓦溜まり1

瓦溜まり1

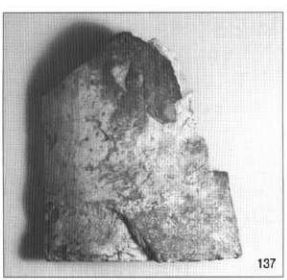
134 瓦溜まり1

135 瓦溜まり1

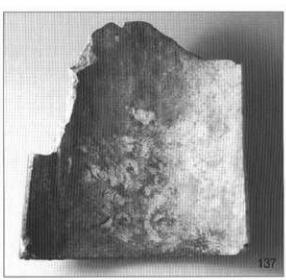
136 SK91



瓦溜まり1



瓦溜まり1

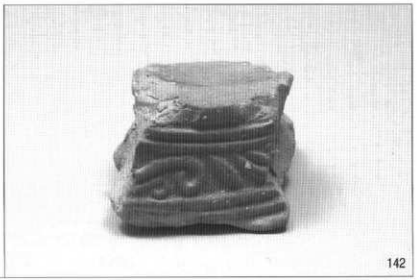


瓦溜まり1

139 瓦溜まり1

140 瓦溜まり1

141 瓦溜まり1



142

瓦溜まり1

143

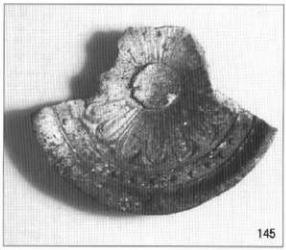
瓦溜まり1

144

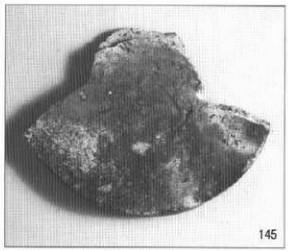
瓦溜まり1

144

瓦溜まり1



SK91

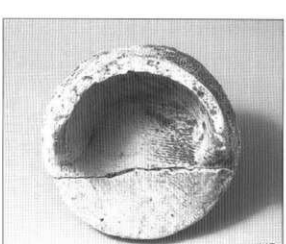


SK91

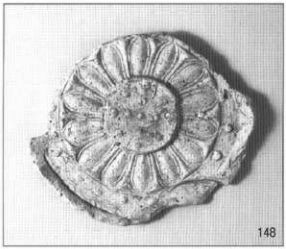
瓦溜まり1

瓦溜まり1

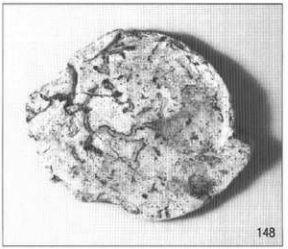
SK91



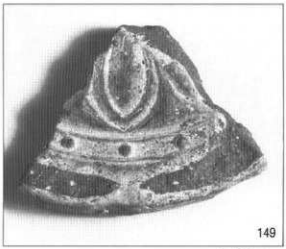
SK91



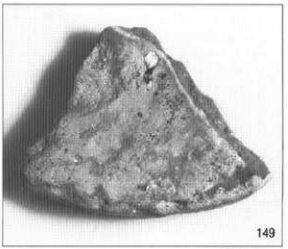
瓦溜まり1



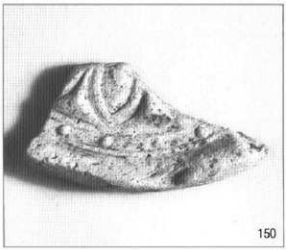
瓦溜まり1



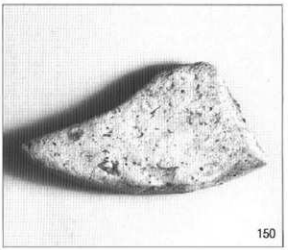
瓦溜まり1



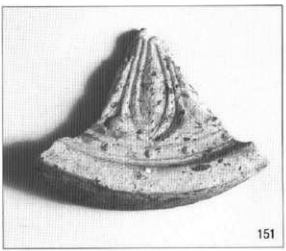
瓦溜まり1



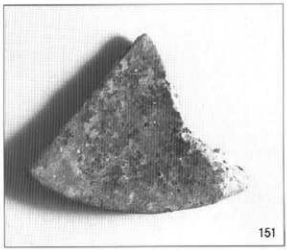
SK91



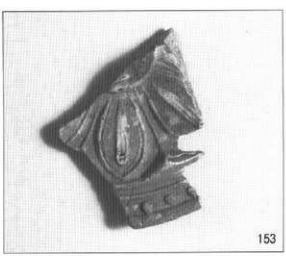
SK91



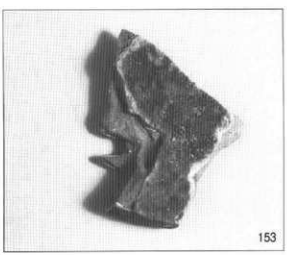
SK91



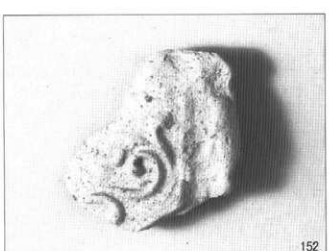
SK91



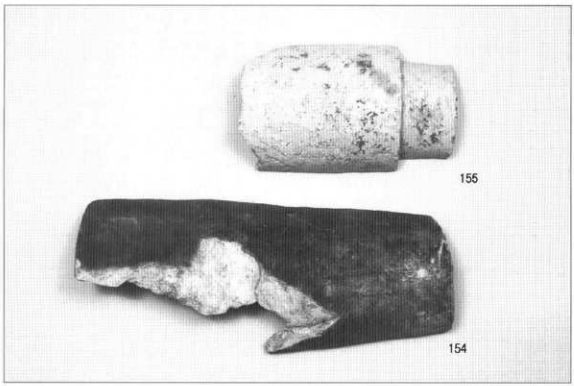
瓦溜まり1



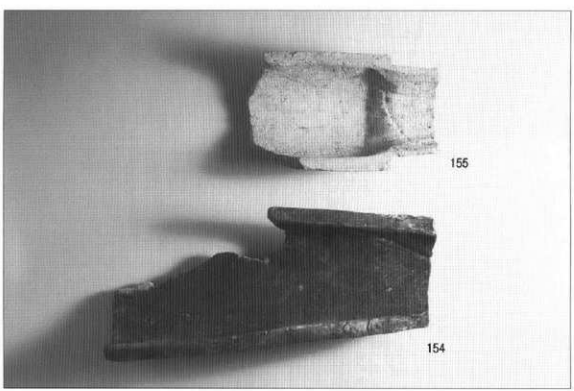
瓦溜まり1



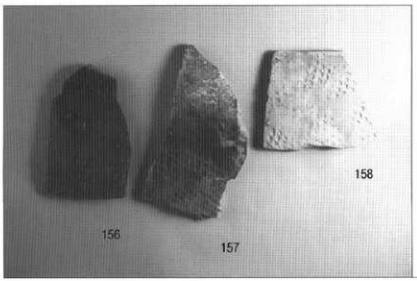
瓦溜まり1



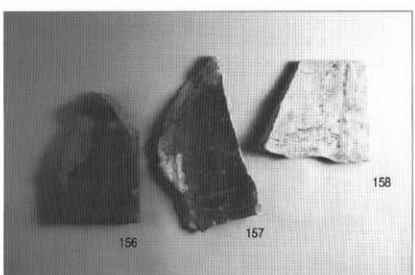
瓦溜まり1



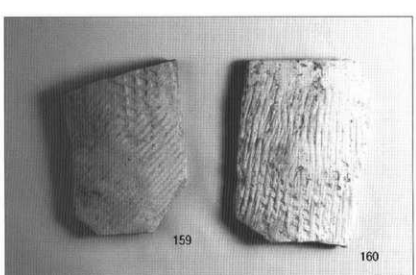
瓦溜まり1



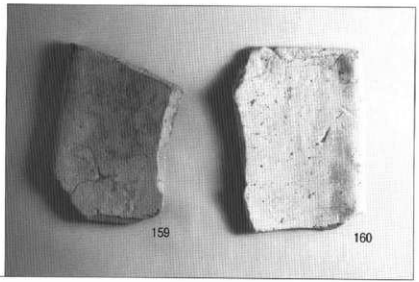
瓦溜まり1



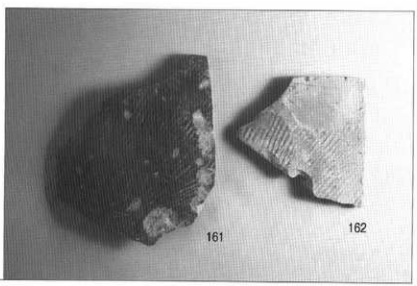
瓦溜まり1



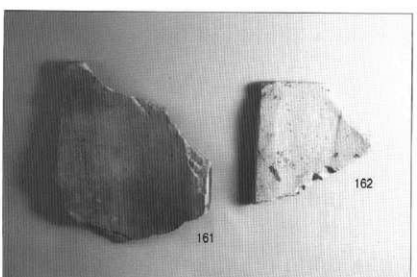
瓦溜まり1



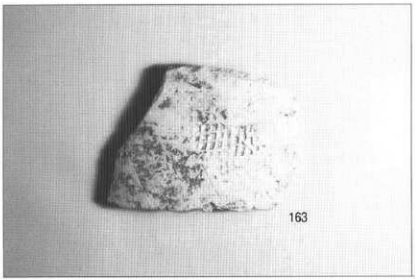
瓦溜まり1



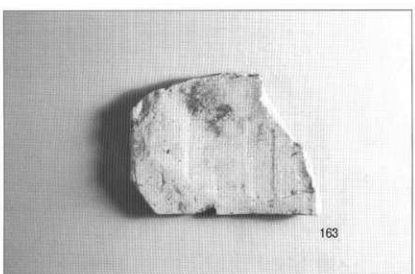
瓦溜まり1



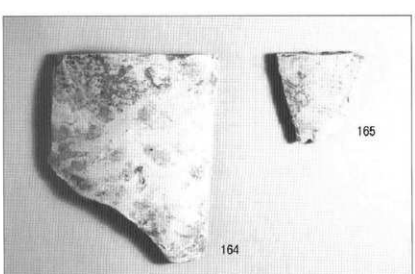
瓦溜まり1



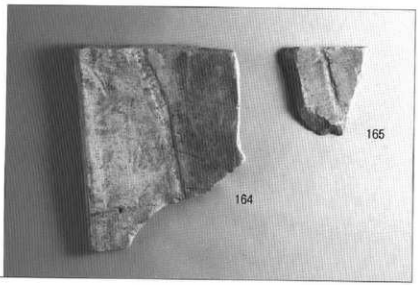
瓦溜まり1



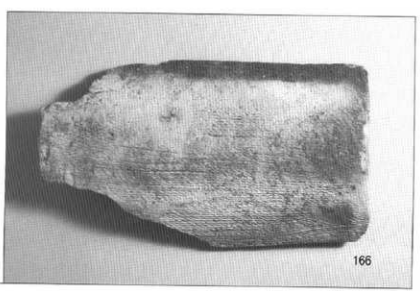
瓦溜まり1



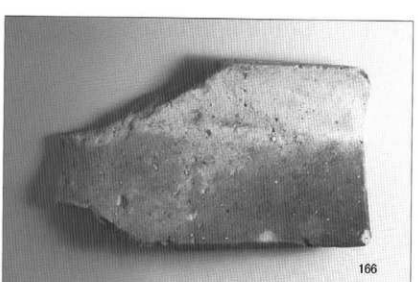
瓦溜まり1



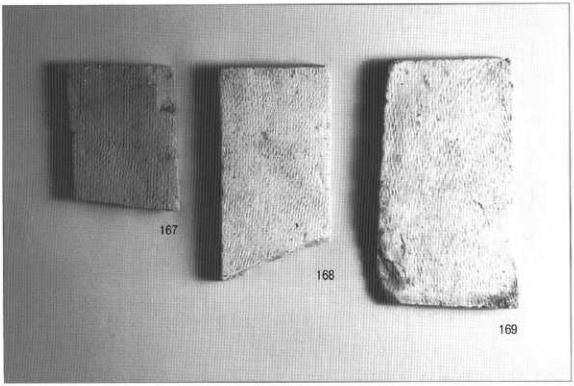
瓦溜まり1



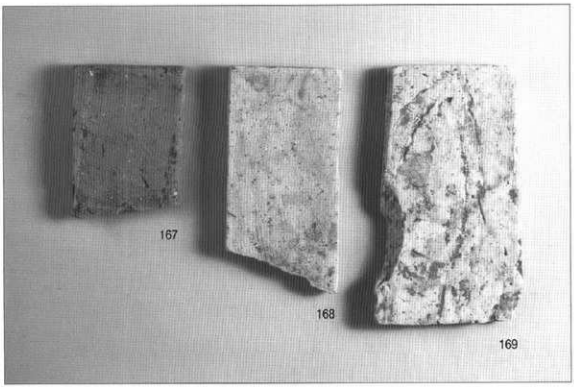
瓦溜まり1



瓦溜まり1



瓦溜まり1



瓦溜まり1

報告書抄録

ふりがな	たけがはなはいじ
書名	竹ヶ鼻廃寺Ⅳ
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	45
編著者名	林　昭男
編集機関	彦根市教育委員会　文化財部　文化財課
所在地	〒522-0001　彦根市尾末町1番38号　TEL0749-26-5833
発行年月日	20100331

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
竹ヶ鼻廃寺（たけがはなはいじ）	彦根市（ひこねし） 竹ヶ鼻（たけがはな） 町（ちょう）159	25202	014	35度 14分 32秒	136度 14分 41秒	1,790㎡	20081020 ～ 20090130	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹ヶ鼻廃寺	寺院 集落	古墳後期 古代 中世	掘立柱建物 溝・柱穴 土坑	瓦・須恵器・土師器・塼輪・鉄製品・鋳造関連遺物	寺域の東境を画する区画施設

彦根市埋蔵文化財調査報告第45集

竹ヶ鼻廃寺Ⅳ

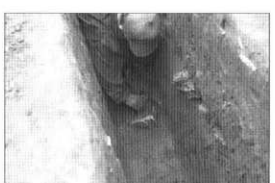
－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業－

平成22年（2010年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財部文化財課
〒522－0001 彦根市尾末町1番38号
TEL 0749－26－5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社
〒500－8074 岐阜市七軒町15番地
TEL 058－263－4101

TAKEGAHANA
ABONDONED TEMPLE



軒丸瓦の出土状況

March, 2010

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division